始

31
604

三浦圭三先生著

人生と修養

31-604

修養

三浦圭三先生著

大正
7. 4. 2
内交

人生と修養序

宇宙の最高實現之を人生と云ひ、人生共通の研究題目之を修養となす。

著者固より淺學菲才、到底斯の間の機微を窮て遺すなき能はずと雖、職に教化の末班に列し耳聞目睹する處、亦聊遑乎の方面に寸益なしとせず、知人文祥堂主岡田氏は眞摯勤勉にして、

正に好個立志傳中の人なり、乃其論に應じて此小著を公にす。

大正七年二月十一日紀元節の佳辰

早梅薫る南窓の下に

著者識

人生と修養

目次

目次

第一章　世の中論……一

□人樣々の陳列場
□人は社會的動物
□自由と束縛の反比例
□社會の制裁とは何か
□儘にならぬが浮世の習ひ
□持ちつ持たれつの世の中
□職業は『持ちつ』の實現

□有爲轉變の世の中
□金が仇の世の中
□せち辛い世の中
□優勝劣敗の世の中
□世の中を知らずには渡られない世の中
□世の中の結論

第二章　身體論……三〇

□完全な身體
□體育の勃興
□精神の住むべき宮殿
□體育の選手は成績の劣等生

□不斷の衛生
□睡眠の心得
□身體各部の注意

第三章　漸進論……六一

大の大なるを知るこ共に小の大なるを知れ

第四章　進學論……八四

□學問の必要
□水にも流れず火にも燒けぬ寶
□學問させるよりは田地を買はせやうこ云つた伯父
□書物を多く讀むよりは實力の養成が大切
□ノートの整理をうまくせよ

□試驗勉強
□意識の轉換に工夫せよ
□時は金よりも貴し、時は生命それ自身なり
第五章　感謝論……一〇八
□感謝生活
□嫉妬につきて
□短氣は損氣
□執念深い人は蛇の性
□感謝生活の對象
第六章　克己論……一三八
□己れに克て

□自己辯解
□意力の數的打算
□誘惑
□自己評價
□自慢
□イエス、ノーの使ひわけ
□古人の克己
□日常些事の克己
□餘談
第七章　生戰論……一七〇
□緒言

□奮闘は現世紀の基調
□矛盾に生きて調和に解決す
□我を助くるものは我
□感奮興起こ立志
□職業の撰擇に就きて
□耳聽えのよい職業
□時世の要求こ自己の性格こ衝突する時はごうするか
□職業に貴賤あり
□勤勉
□儉約こ吝嗇こは従兄弟似
□死に錢使ひ
□貯への善い人悪い人

□江戸ッ兒は宵越しの金を使はぬ
□知足安分
□見え坊即虚榮
□驕るは易く締るは難し
□小成に安んずる勿れ
□正直
□不言實行
□勇氣
□生れつき臆病なものでも矯正するここが出來る
□風蕭々こして易水寒し
□意氣地なし
□御無心もの其一

□御無心もの其二
□自治獨立
□生戰の落武者―自殺
□人生觀こはなに?
□消極主義を排して積極主義
□厭世主義でなくして樂天主義
□破壞主義でなくして建設主義
□保守主義でなくして進歩主義
□非社會主義でなくして社會主義
□利己主義でなくして利他主義
□死を惜しむも不可

人生と修養目次 終

人生と修養

第壹章　世の中の論

三浦圭三著

人樣々の陳列塲

世の中にゐて世の中のわからない人間は世の中にいくらもある。

世の中をなにのヘチマと思へごも

ブラリこしては暮されもせず（狂歌）

こ云つて此世の中を「何のヘチマ」こ考へた人もあるが、さりこてブラリ〳〵こ

ばかりして左團扇に　懐手では暮されない。

世の中をうしこやさしこ思へごも

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば　（山上億良）

世の中はいやな、うるさいものこ思つても翼なき身はたつて逃げるわけには行かず、困つたものだこよんだのである。

世の中は何か常なるあすか川

昨日の淵も今日は瀬こなる　（古今集よみ人知らず）

朝の紅顔は夕の白骨こ變り、昨日の長者も今日は乞食こ落ちぶれ、生老病死なご云ふ四苦八苦が絶えず人生に訪れて世の中の有爲轉變はまるで飛鳥の川の淵瀬常なきが如しこ云うたもの。

殊に近來世の文明が進み生存競爭が劇しくなるに連れて世の中の有樣が愈々益益複雜多樣こなつて、さアあちらでは大水で騒でゐる、こちらでは火事だこわめきたてる、汽罐が大爆發をする、電車が脫線する、櫻島が噴火する、潛航艇が地中海であばれる、富士山に初雪がある、太郎作が諸掘に忙しくなる、村の長者の一人息子が大學を出る、隣の大工の娘のお花が嫁入をする、向では鷄を狐にこられたこ云つておろ〳〵云つてゐる、三軒目には執達吏がきて差押の札を貼つてゐる、あちらの辻では自働車が人を軋いたこかでヤツサモツサ。

斯う色々の方面を書きたてるこきりがないもの、それがものゝ一時間こ立たぬ中に又それ〳〵別々に變つて行く、更にそれが一年二年こたつこ又々更に大なる變化を見る、其複雜なここゝ云つたらごんな筆まめな人でも一々之を筆寫するここは到底不可能である。

此こみいつた世の中を「斯樣々々云々のもの」こ簡單に言ふここは一寸むつかしい、いや一寸所がなか〳〵むつかしいが、併それがわからねば人間が世の中に生きてゐる意味もわからない道理だから、鳥や獸こ同じなみに一匹前の生活で

よろしいこ云ふ人ならばいざ知らず、苟も萬物の靈長こして一人前の生活をして行かうこ思ふ人は是非こも「世の中」こはごんなものかを知らなくてはならない。

人は社會的動物

人間こ云ふものは一人立ちで生存の出來るものではない、「人」こ云ふ字は斜の線が二本よつて出來てゐるが其字の通り人は二人が互によつて相憐み相扶けて行くべきものである、又「仁」は凡ての德の本だこ云はれてゐるが此字をわけるこ二人こなる、少くこも二人生存してゐるこころに必要な德こ云ふ意味である、よく人によるこ「アヽもう世の中がうるさくなつた、ごこか誰も居ない處へ行つて一人住みたい」なご云ふが偖て其通り絕海の孤島や奥山の岩窟へいつて一人ボッチにしておいたならばたゞの一年でも否一ケ月でも到底居れたものではない、人間は一日に一度も鳥が啼かんでも何こもない、雀が啼かんでも何こもない、けれごも人間に遇はんでは何こなく物足りない、大へんに淋しい、二日も人に遇はぬこ大へん人なつかしくなる、牢屋の囚人はあまり連がないのでしまひには鼠こ懇意になるこ云ふが、人間こ云ふものはごうしても自分一人かけ離れて生活をすべきものではない、アリストートルが「人は政治的の動物である」こ云つたのも、近世社會學者が「人は社會的の動物である」こ云ふのも此意味をあらはしたものである。

自由と束縛の反比例

處が誰しも感ずる如く多數の人々が一緒に集まるこ云ふこめい〳〵お互に窮屈になつてくる、自分一人つきりなら欠伸をしようこ胡座をかかうこ髯を捻らうこ耳糞をこらうこ鼻をかまうこ十時に起きやうこ氣隨氣儘の仕放題でごないし

ても誰も不平をこぼすものもなく誰一人非難攻撃惡口罵詈嘲笑をするものがない、世に云ふ「ひこり者の氣樂」とは此をさしたもので成程ひこり者は氣樂は氣樂に違ひはないがさりとて自分の着たい、食ひたい住まゐしたいと思ふ事は自分が努力しただけしか充たされないから此點が非常に不利益である、大分寒くなつた米澤織の丹前がほしいなと思へば自分が絲なり綿なり反物なりをこゝへて自分が裁つたり縫うなりしなくちやならない、一度松茸飯が喰ひたいと思へば自分が市場に行つて松茸を買つて持つて歸つて井戸端で洗つて、菜刀で切つて鍋で煮て、米をこいで、よい加減にまぜて、竈にかけて下を焚きつけて、薪をくべてうまく煮えた時分を見計らつて火を引いて、うまして、さまして、櫃にあけて、釜を洗つて、杓子をつけて、茶碗を出して、よそつて、お箸を出してさて喰ふと云ふ風にしなくちやならない、のみならず此は獨りずみと云つてもまだ此社會の中で生活をしてゐる獨身者のことだから其不自由はまだしも辛

棒が出來て呉服屋に行けば反物があるし、松茸店に行けば松茸も買へるし、米屋へ行けば米も買へる譯だが全然社會とかけ離れた生活をしたならば呉服屋もなければ松茸店も米店もないのだから、我自ら呉服屋となつて反物を賣らなくてはならぬ、こゝろが其反物だつて天から降りも地から湧きもしない矢張人間の手で織つたものだから、更に職工となつてそれを織る必要がある、織る爲には絲が入る、絲は製絲場で紡ぐのだからこんごは製絲場のまねもしなければならない、所が其製絲場では繭を買つて材料にするのだからこんごは繭の仲買人の眞似となる、それから養蠶家、蠶卵紙商と次々溯つてしらべて見ると到底一人でやりきれない、着る方だけで此通だが食べる方だつて同じく數多の手が必要である、先つ松茸飯にした米についてを見ると第一米の小賣店のまねをせなくちやならない、其小賣店は大賣捌からこつたもので其大賣捌は地方の農家で買ひ占めたもので其農家の一軒々々は色々の肥料によつて耕作をしたもので其

肥料屋は漁村の乾鰯商ミ取引してその乾鰯商は最寄の漁夫から買ふミなつて一一其等の眞似をしなければならぬミなるミ大變なことである、住む家を建てるにしても矢張同樣大工も入れば材木屋、鍛冶屋、庭造り、植木屋石屋、土屋、家具商ミ云ふやうないろんな者の仕事をしなくてはならない、サアかうなつては如何に全智全能靈妙不可思議の神でも佛でも、千本手のあるミ云ふ千手觀音でも一人で吳服屋になつたり米屋になつたり大工左官になつたりするミ云ふことは到底不可能である、それが社會に居るミ何もかも分業になつてゐてソラ反物が入る、ヨシ吳服屋へ行けつてお金さへ持つて行けば吳服屋大よろこび澤山がらを見せてごれなりミお好きなものをミ云ふ、そこでよりごり見ごりして代を拂つて反物を貰つて『有がたうございます』『毎度ありがたうさん』の聲に送られながら大手を振つて歸られる。ソラ米がない、米屋を呼べ、屋根が洩る、屋根屋に云ひつけろ、ミ云ふ調子でごんなことこもその道々で專門

にしてゐる人があつて自分がするよりずつミ巧者に手際よくやつてくれる、實に人間は人間のお蔭で生活してゐるのである。

吾自ら帽子を被るミ思ふは誤まれり、他人之を被らしむるなり。

ミは社會學者が此間の消息を示したものである。

一人居れば氣隨氣儘の仕放題だから寢やうが起きやうが、しやべろうが、しやべるまいが、敢て不都合だミ咎めだてするものがない 卽 意志は全然自由である が二人居れば此自由意志の範圍は二分の一ミなり三人居れば三分の一四人居れば四分の一ミなつて連れが增せば增す程、自由意思の範圍がせまくなつて束縛を受ける分子が廣くなる、氣樂さが減つて窮屈さが增して來る、けれごも一人居るよりは二人居る方が心强く、二人居るよりは三人居る方が心强く、四人ミなり五人ミなり六人ミなれば其心强さは四倍ミなり五倍ミなり六倍ミなつて來る譯である。

社會の制裁とは何か

其多勢居るここに由つて生ずる窮屈さこ云ふものが取も直さず倫理の先生の所謂『社會の制裁』なるものである。

夏は帷衣を着、冬は綿入を着る此は社會一般の風習である、それだのに之を反對にして夏綿入を着て冬帷衣を着たらば誰だつて笑うにちがひない、その笑うこ云ふのが抑々制裁の一種なのである、尤此は衛生の上から見ても冬帷衣は寒いから着る者はなからうが、寒くないやうにするんなら下にごてらを着て上に帷衣を引張つても敢て差支はないわけであるのに、それに人が之を笑ふから止すこ云ふのは社會の制裁である、又食事にしても同樣である、各人の胃袋は必ずしも同一容量こ同一消化力こを持つてゐる譯ではないから一つの會同に列席した人の中九時頃已に空腹を感ずる人もあらうし、九時十分で一寸透腹になる人もあらうし十時頃たべたいこ思ふ人もあらうし、十一時にもう晝食した方が可いこ思ふ人もあらうし十二時が來ても腹が透かんで困るこ云ふ人もあらうけれごも、議事が一通結了を告げて十二時近い時刻になつて會長から『午前の議事は此でおきまして』こ云はれないつゝいたりする人は誰もない、あつたら皆の笑ひ者にならう、此卽一種の制裁である、住所だつて何も今の通で無くてはならぬ筈はないが、さりこて家の者は正門の立派なこころから出入して來客には關木の下を潜らせたり、屋根は雨露を防ぎさへすればよいこ云ふので溝圍扇を葺いたり、鍋釜を床に据えてせつちんに掛物をかけたりしたらばきつこ衆人の罵詈嘲笑の的になるここであらう、此も矢張社會の制裁である、窮屈ではあるが此があるお蔭で多數の人が安全に生活して行ける、制裁は吾々が社會こ云ふ大きな團體に加入する時の『入會金』だこ思へば腹は立たない。此廣い世界に誰一人こして自分の我儘ばかり

通して暮らしてゐる者がない『人をつかへば苦を使ふ』道理をおもへば制裁は又社會こ云ふ大きな車輪の軋りを緩和する油こも謂はれやう。

儘にならぬが浮世の習ひ

廣い世界に誰一人我儘のしたい三昧に暮らすものはない。畏れながら天皇陛下こ雖、矢張御氣に召さぬ點があつても御辛抱なさるここが澤山あらう、堀河鳥羽の兩みかごの朝、始めて院廳の政治を執つて天下の大政を意のまゝにせられた、白河法皇でさへも尚まゝならぬ事がおはしたこ見えて、

天下朕が意に任せぬものが三つある、加茂川の水こ双六の賽こ山法師こだこ仰せられた、社會に制裁があつて我々の自由を束縛する上に『自然』こ云ふ大敵がまた吾々に壓迫を加へる、數百の人夫が汗水たら〳〵で築いた防堤も一夜の水に遇へばあこかたなく流されてしまふ、こわいものを地震、雷、火事、

親爺こ云ふが、親爺はいくらこわいこ云つても血もあれば涙もあつて幾らか慈悲がある、其餘の天災こきては遠慮も會釋もない、ドシ〳〵人間を窘めてかゝる、草履で行かうこすれば雨がふる、傘を持つて出れば日がカン〳〵こ照る、薄着で出かけるこ風が冷たい、雪が降る、癪に觸る程自然は意地惡に出來てゐる。

社會の制裁こ自然こ二つが絕えず我々を束縛してゐるから、我々は未來永劫意の儘に暮らすこ云ふここは不可能である、だからぎの人も此人も何の云ひ分なしに暮らしてゐる者は誰もない。子寶が多いこ思へばお金がなく、お金がたまつても子が出來ず、お金もたまり子もありしてもそれが病身で始終醫者の手にかゝるもあり、今年は豐作だこ悅んでゐるこ、祖母さんが亡くなる、家族は皆無事だこ思ふこ親戚に不幸がある。家族にも親戚にも不幸がないこ悅んでゐるこ、畜ひ牛が斃れるこ云ふ風に何こか、かこか不時の災難が續々やつてく

る。

花には嵐、月には叢雲、世は生憎のものこゝきらめて其災厄のふりかゝつた時泰然こしてあわてず騒がず、おちつきながらも機敏に其間に處して行くこゝの出來る人は確に修養が出來た人である。

まゝならぬ世ぢやものお前きり〳〵す　（一　茶）

何も悲しいのはお前ばかりでないぞこ云つた一茶の句はよく此邊の悟りをあらはしてゐる。

棚から牡丹餅

こ云ふけれごも、今の世では、なか〳〵棚に牡丹餅がころがつてゐるやうなこゝはない、うつかりするこ棚から書出し位が關の山である。

持ちつ持だれつの世の中

我着物は呉服屋から買ひ我食物は米屋、八百屋から買ひ、我住宅は大工、左官のお蔭で建つこ云へば社會生活は如何にも氣樂で結構なやうだが、人から世話を受けるばかりが人間の能ではない、自分も亦何等かの方法を以て他人を扶けなくてはならない。自分は何もしないで居て他人の厄介ばかりになつてゐる人は、

持たれつ持たれつの生活

であつて、こんな意氣地のないこゝは面白くない。之に反して人の世話ばかりをして、ちつこも人から世話を受けるこゝのない人は、

持ちつ持ちつの生活

で、此程つまらぬこゝもない。世の中は持たれつ持たれつでも可けないが、持ちつ持ちつでも可けない、必持ちつ持たれつでなくてはならぬ。

職業は「持ちつ」の實現

そこで各人は自分は何の方面から他人を助けやうこ云ふここを定める必要がある。ご の方面からなりこ、其時の都合やいで色々の手傳をするこ云ふここは、時間こ勞力こ人物この上に於て甚しい不經濟である。いつも同じ人が同じここをする方が利益であるこ云ふのが分業の法則で、各人は是非こも一定の『持ちつ』の方面を定めなくてはならない。是卽職業を定めるここの必要なる所以である。

有爲轉變の世の中

祇園精舍の鐘の聲には諸行無常の響があり、娑羅双林樹の花の色には盛者必衰會者定離の理を示して人生は永久に無常なものである。

賣家こ唐樣で書く三代目
一世の豪華を以て三都に鳴りわたつた何々長者も、子の道樂孫の放蕩が禍して三代目には『賣家』の札がつく。
昨日まで人のここぢやこ思ふたに

（川　柳）

おれが死ぬこはこいつたまらぬ　（一　休）

誰一人こして自分が死ぬるなご考へてゐるものはないが、又誰一人こして死なずに濟むものもないのである。朝紅顏の美少年も二豎膏肓に入つては、夕あだし野の煙こ化し、今、元氣よく快談してゐる人も五分間の後には心臟痲痺で頓死する。

髮よかれかたちよかれこたらちねが
めでし少女よあはれこの墓　（自　咏）

若きが先だち、老いたるが殘る逆修の哀しみは至るこころに見られる。廣い世

の中に何一つこして永久不變に其現狀を持續し得るものはない。南歐東亞を席捲したアレキサンドルも、シャーレマンも、秦始皇も、忽必烈も無常の劫風には對抗し得べくもあらず、汚ちては一片路傍の土塊こ何等選ぶところがなからう。

つひにゆく道こはかねてきゝしかご
昨日今日こは思はざりしを　（在原業平）

人間の眞相は斯の臨終の態度によつて値打ちつけられる。無常が世の常こ覺悟して、いつ死の神が誘つても泰然自若こして息を引きこるこごの出來る人こそ眞に立派な人こ謂ふべきである。

金が仇の世の中

よい着物がほしいこ思へば先だつものは金である、旨い物が喰ひたいこ思つても先だつものは金である、だから世の中で何が一番大切かこ謂つて聞くこ、大抵の人は一にも金二にも金三にも金こ云ふ。

地獄の里も金次第

こ云ふが極樂の里も金次第なら娑婆の世界も金次第こなつて所謂『金が仇の世の中』を實現しつゝあるのである。試みに四ツ橋の灯こもし頃を街頭に立つて眺めて居るこ右往し左往し北し南する人樣々の有樣は實に複雜至極なものである。それ等幾多の人は何の爲にヂタバタしてるかこ云ふこ結局は皆金の爲である。金の爲には車掌もすれば運轉手もすれば、ポインターマンもすれば集配人もすれば靑物も賣れればパンも賣れば撒水夫もすれば線路工夫もすれば廣告配りもすれば肥取りもすれば煮賣屋もすれば辻占賣もすればカリ〳〵煎餅屋もすればマッチの箱貼りもすれば詐僞取財もすれば横領罪も犯せば官金費消もすれ

ば貨幣僞造もすれば收賄罪も犯せばゆすりもすればもぐりもすれば賭博もすれば、あらゆるこゝをするのが今の世の中である。金の爲には目を縦に切らすこともあれば口を狼のやうに裂くこゝもあれば親類仲たがひもすれば友達絶交もすれば親子喧嘩もすれば兄弟喧嘩もすれば夫婦離別もすれば、自殺もすれば他殺もすれば貞操をも汚すこ云ふのが今の世の中である。金錢何が故に而く貴いかこ云へば、畢竟、生活困難の世の中だからである。

せち辛い世の中

生活難の聲は近頃段々高くなつた。生活の程度は高まる、物價は高くなる、收入は增さぬ。こなるこ勢生活は困難こならざるを得ない。鯛のさしみが食べたい金がない。櫻正宗の熱燗を一杯グイこ引つかけたい、金がない。セルの半ゴートがこしらへたい、金がない。ダイヤ入の指環が欲しい、金が無い。座敷に毛氈が敷きたい、金がない。絹夜具を一通拵へたい、金がない。金がない〳〵勝だが此等はまだ贅澤の部である。下流の貧民になるこ、イヤ米がない、薪がない、醬油がない、鹽が無い、親類へ無心云ふにも端書一枚買ふ錢が無いこ云ふ風なのが幾らもある。以前ならば壹圓のお金は可なり使ひごたへがあつて三日も五日もそのまゝあつたものが此頃のお金の無くなるのが早いここ〳〵羽でも生えてるるかのやうに、朝くだいた五圓が晩はたつた貳拾錢あまりしか殘つてない、ごうしてこんなにないのだらうか、落しはしないかこ算盤こつてボツリ〳〵こ置いて見るこ成る程、貳圓八拾錢で米を一斗買つて四拾六錢で鮪を買つて七錢でマッチを一箱こつて五拾貳錢で酒を五合買つて貳錢で蒟蒻を三つこつて六錢が油揚、貳拾錢が七年忌の法事の御馳走を持つて來たお禮六拾八錢が雜誌三月代で、それをゞるこ四圓八拾壹錢こなり、算用合うて無いものは矢張金である。

生活難――生活難――いくら生活難ゝ叫んでも、金は天から降るものでもなければ地から湧くものでもない、矢張りめい〳〵が努力をして頭をつかうなり手足を使うなりして働かなければならない。所が其働かうにも働く口が又さう容易に見つからぬものではない。或人は東京に行つて五ヶ年の間職業を求めてつひに見つからずこう〳〵外國迄出稼に行つたゝ云ふゝが黒岩涙香氏の精力主義に載せてあつた、今の世の中ではこんなことは決して一場の作り話ではなからうゝ思ふ。茲に一個の職業があるゝする候補者は忽ち十人集まる、そこで最優れた一人が其職業にありついて、殘り九人のものは職業を失ふことになる。

就職難々々々

ゝ云ふ聲が段々高くなるが、右樣の道理で如何ゝも仕方がない。

優勝劣敗

ゝ云ふのが進化の原則たる以上如何ゝも仕方がない。

優勝劣敗の世の中

何をするにも金が入る、金が入るから働かうゝ思つても働く職が見つからぬゝなるゝ茲には劇烈なる生存競爭が始まる。昔は物が多くて人が少かつたから物が十なら人は一位の割で一人の人が一人前をこつても殘りの九人前は餘つてゐた、隨つて土地なゝも安價なものゝこなつてゐた。現に余の知つてゐる大阪の土地で土一升が金五升にも當る目貫の塲所や恰好の邸宅地がこゝ七八十年前まで持ちてが無くて、何か他人に不都合でもして詫び證文を入れる時には『萬一再斯樣なる不都合を相出來し候節は右〇〇〇の土地を拙者が讓り受け申すべく』なゝご認めて、斷の條件に土地を貰ひ受けるやうな悠長さであつた、それが今では地代がウンゝ上つて坪參圓五圓位から拾圓

貳拾圓五拾圓と段々あがつて件の土地なぞ貳百圓でも買はれない、否幾ら高く買つても賣主は絶對に手放すことは出來ぬまで云ふやうになつた。つまり今の世は人が多くて物が少いのだ、人が十なら物が一しかないから一人が滿足する爲に朝から晩まで晩から朝まで年が年中バタ〳〵〳〵〳〵あせつてゐる、智力に於いて才力に於いて體力に於て財力に於いて他より優つたものは其一にありつき其の余の九人は指を咬へて見てゐなければならないと云ふのが今の世の中である。

世の中を知らずには渡られない世の中

昔は井の中に居て大海を知らぬ蛙でも一匹前の蛙で通つたが、今の世の中はさうは行かぬ、家にばかりふすぼつて女中や細君に威張つてゐるだけでは世間に通用しない、『君、世の中と云ふものはそんなものぢやないよ』と云はれてグーの音も出ない、『君はも少し世の中を達觀しなくちや駄目だ』と云はれても何と言へない、交通機關が發達して東西洋の通商往來が盛な今日では何を言ふにもするにも世界的である、昔なら瓜や南瓜の出來不出來さへ話せば濟んだ百姓の田吾作迄がイヤ『此頃獨逸軍の活動は目ざましいではないか』とか、『日米親善の話が新聞に出てゐた』とか云ふ、以前なら出納簿一册位捻くつて店に挖へて居れば關の山の番頭が『イヤアメリカの制鐵案で日本も大分打擊を受けるだらう』の『南洋のゴム栽培が大分有利な見込がついて來たの』と生意氣なことを云ふ。横濱の埠頭に一指を染めて一波を起せば一波は萬波となつて桑港に届く世の中だから、此迄のやうな小天地に跼蹐しては居れない、居つては人が馬鹿にする。世界の大勢は早晩我國に影響し、我國家の大勢は又早晩吾々國民に影響するから、何も稚氣や衒氣で世界に眼をこめるのではなく、實際の必要上世界を相手ごらなくてはならなくなつた。それだのに矢張從來の慣習に囚へられ

て狭い〳〵猫の額のやうな家庭や、一會社一商店で威張散らして重箱の隅をせゝるやうなことを云つてをつたならば、まるで盥の中の行水同様その人はその人切りの言語行動に滿足して世界の大洋の水を知らない人である。海水浴に浸つて沖邊に寄する大波が見える人なら、早晩あの波がこゝへも寄せて來ることを云ふ位の見當はつく筈だけれごも、斯の種の人にはそれがわからないのだから盥の中で行水してゐるやうなものだ。で、昔ならば大名の馬鹿威張りで紙横裂の無理をも通せたらうが今日の貴族はそんなわけには行かぬ。歐羅巴の皇族には態ごと身分をまぎらして鍛冶屋の職工に住み込んだりなごした人もあるのは、つまり世の中を見學の爲の修業なのである。

世の中の結論

以上述べた所がマア大體今の世の中の有樣である。人樣々、物樣々の陳列場である

我意は通らず自由は束縛せられ社會の制裁ごか云ふ網にからまれて儘にならぬ勝であるが、併し互助依從の法則が其間に行はれて、持ちつ持たれつ扶け合つてめい〳〵の職業に勵んで行くまではまだよいごして、有爲轉變無常迅速の厄に逢うては誰しも免るゝことが出來ない、そしてお金が幅をきかしてそのお金を得やうごするには就職難があり生存競爭があり結局適者生存、弱者衰滅、優勝劣敗、弱肉強食ごなる。此が世の中の眞相である。そこで此世の中に處して行くには是非ごも適者ごならなければならない、優者ごならなければならない強者ごならなければならない。その適者たり優者たり強者たる爲にはごうすればよいか、それが差當り講究すべき問題ごなる譯だ。

尤余は右の題目を研究すればそれで修養の能事終れりごは云はない。近頃の修養書類は大抵右樣の題目を擧げてゐるが、それだけで人間の修養が充分だごすれば人間はあまりにあつけないものである。新渡戸博士が言はれたやうに人

間は水平線の空氣ばかり吸うてゐは可けない、縱の空氣を吸ふ必要がある。高遠な理想を立て、幽玄な崇拜の對象を求めて上へ上へと向上し、神に近い生活を庶幾しなければならない。井上博士（哲次郎先生）の文學論にもある通り人はパンのみで生きて行かれるものではない、少しは趣味の何たるをも解しなくてはならぬ。洋服のカウスの釦は何の爲かと訝かるやうな人では可けない。戰場に立つても簏に梅を挿む古武士の雅懷が無くては面白くない。已に現代文明に食傷した先輩有識の人々は、今の世の中が餘りに物質的に偏してゐる科學萬能に凝りすぎてゐるなど段々攻撃をしかけた、此からは現代文明批判論と云ふものが段々盛になるであらう。だから余をして完結した修養論を說かせやうと云ふのならば行論の取材はごうしても、

一、實生活論
二、理想論

三、趣味論
四、宗教論

の四大項目に亘らなければならない。而し此内何れが先であるかと云へば、一の實生活論である。此が人生修養の第一義である、其餘のことは此が或程度まで實行された上での話である。

業平も飯喰うてからかきつばた

趣味や理想や宗教の燕子花を見やうと思ふ人は先づ實生活で飯を喰ふことを守らなければならない。でないと

業平も飯が無ければ餓鬼つばたの類に墮するであらう。依て余は以下主として此第一義に就いて講じ、生の戰に參加する勇士となるが爲にどう云ふ弱點を去つてどう云ふ武器をとつたらよいかを述べやうと思ふ。

第二章　身體論

完全な身體

昔から
　命あつての物種
こか、
　活潑なる精神は健康なる身體に宿る
こか、
　健心は健身に宿る
こか、種々なることばを以て身體や生命の大切なことを戒めて在る。
　先だつものは金
こ云ふけれごも金より以上に、
　先だつものはからだ
である。近頃道路を通るこ、細く痩ぎすの、吹たらたつやうな人が、ヒヨロヒヨロ然こして通つてゐて、色の白いのは藁のやうにあり、色の黒いのは針金に味噌つけたやうにあり、ごこを行つても此藁こ針金こがナヨ〳〵タヨ〳〵ヒヨロ〳〵トボ〳〵こ歩いてゐる。此は實に悲しむべき現象である。苟くも將來生存競爭の檜木舞臺に立つて精一杯の活動をしやうこ思ふ者は少くこも五尺四寸の身長こ十六貫目の體重こを持たなくては併いくら身長が長く體重が重くても其だけで完全な身體こ云ふわけには行かぬ古代希臘の國民は早く體育の忽にすべからざるを悟つて大に運動を奬勵し年々催さるゝオリムピヤの大會は、國内割れんばかりの景氣であつたこか、その希臘人があけた理想の體格には四つの條件がある、

一、健康

二、強　壯
三、敏　捷
四、整　美

健康こは無病息災位のこゝは誰しも能ふではないかこ云ふやうな者の、偖嚴密に今日國民の體格を調べたならば、多くは有病不息災である、八種傳染病、癩病こ云ふやうなものは抜きこしても、胃腸の悪い人や、痔疾の人や、皮膚にふきでものゝ絶えない人や、内臟がよいこ思へば齒がうづいたり、齒がよいこ思へば鼻の治療を受けたり、眼がトラホームであつたり、耳が耳漏であつたりこ云ふ風で四肢五體の全部にわたつてちつこも病のない氣がないこ云ふこゝはなか〳〵むつかしい、よし之が充分だこしても此だけでは身體は消極的に完全でぢつこして居るには差支ないこ云ふに止まつて、進んで何か困難なこゝに當らうこ云ふには是非こも第二の強壯こ云ふこゝが大切である、強くしつかりこしてゐて多少の無理をしても何こもないこ云ふ身體でなくちや物にならない、平素は何こもないが少し急用があつて夜更しをするこか徹夜をするこか遠道をするこかするこ、直ぐにバッタリ倒れるこ云ふからだでは困る、それこ同時に又筋肉其者の力も必要である。農村の男子は秋になるこ五斗入の米俵を擔いで、それがらく〳〵こ肩にあがるやうになれば先づ一人前の力だこ云ふ、五斗の米は二十貫ある、二十貫目を擔ぐ位の筋肉の力は是非男子に必要である。勞働者でなくこも、ざんな必要があつて可なりの重荷を持たねばならぬこも限らない。又女子でも四五貫目の者は持ち上げるだけの力は必要である、でないこバケツ一ツ提げるここも洗濯物一つ運ぶここも乳呑兒一人抱くここも出來ない。だから強壯こ云ふこゝは丈夫なこゝ、力の強いこゝ、兩方含まれてあるものこ見なければならない。健康で強壯な上に敏捷でなくてはならない。『誰さん』こ後から名を呼ぶこす

ばやい人は直ぐに『ハイ』こふりかへるが、ぐずい人は暫らくこみかう見して
さて後にやうやく象のやうに振向いて『ハアーイ』こ云ふ、同じ返事でも此だ
け敏捷こ遲鈍の差がある。こ云うても何も早いばつかりがよいこ云ふのではな
い。

拙速は巧遲に若かず

で遲くても上手に出來る方が早くてもまずいよりは優つてゐる、唯それよりも
優つてゐるのは早くて而も巧なのが一番よい、つまり事をする上に於て、

早くて巧なのが上
遲くて巧なのが中
早くて拙いのが下
遲くて拙いのが下の下

である。處が大抵のこは兩立せぬもので手の早い人は粗雜であり綿密な人は

ぐずいこなり易いが、唯長年練習の効を積んだ上から云ふこ早い人は大抵上手
で、遲い人は大抵下手である。下駄屋が下駄の鼻緒をすげる手つきを見るこ殊
にさう云ふ感じがする。吾々が出勤の支度をするにしても、早い人はチヤンこ
必要なものを順序に揃へておいてズボン下、靴下、シヤツ、ホワイトシヤツ、
カラー、ネクタイ、ズボン、チヨツキ、上被、オーバアー、帽子、靴こまるで
服裝競爭の選手の樣に機敏に電光石火、物の五分こかゝらない。ぐずい人にな
るこ十分も十五分もかゝつてもまだカラーのボタンが堅いの詰るのこマゴツイ
テゐる。一家の主婦こなつても機敏な人は子供のおしめ替へから寢屋の掃除か
ら臺所の後片づけまでチヤント電燈の下でやつてしまつて、八百屋が來る時分
には梳きたての髮で兒を抱いて見に出る位だが、手ぬるい細君になるこ物の四
時間もゴト〳〵こやつて子供は泣き出す、お菜はこけつく、お椀はひつくりか
へる、茶瓶はふき出す、疊一面灰かぐらで、自分の髮も椶櫚箒のやうにしてフ

ウフウ云うてやつてゐる。此はつまり意識的修練の結果によるものである。吾々が原稿を書くにも同樣で遲い人は一度草稿を起して二度も三度も自分で推敲して、さて之を淸書するに夏の日永に一日かゝつて僅に三枚字數ならたつた一千五百字位しかはかどらぬ人もあるし、ペンを取るまでに充分想を凝らし、書かうとする題目に適當な知識を皆集めて豫め頭の中で順序をきめて、さて一旦ペンを採つたら滔々數萬言立どころに書き下して而も其行文は明暢流麗、婉轉自然の如きものがあつて一日の起稿三十ページを下らず之を字數に直して一萬五千字以上、而も毎日續けて毎月一千頁內外の大著を續出するだけの起稿力を持つてゐる人もある。

健康で、强壯で、機敏ならば先づ立派な身體と云ひ得るが、尙今一つ整美と云ふことが大切である。整美とは各部發達の調和から生ずる美のことである。車夫の足、鍛冶屋の腕此は如何にも逞しいが足だけ、手だけ發達したものは整美とは云はれぬ、手も足も胴もどこも皆同じやうに比例正しく發達したものが即整美である。頭ばかり大きくて足の細いのも可けない。眞に立派な體格は頭と手と胸と腹と腰と上肢と下肢と何れの部分も調和的に發達したものでなければならぬ。

體育の勃興

以前は肉體と云ふものを非常に輕んじて、食はず飮まず眠らず休まずで難行苦行をすることが、克己制欲の美德であるかのやうに考へられた時もあつた。此等の多くは心身二元論者で精神は肉體と何等の關係がないものと前提をおいての議論であるからお話にならない。精神は肉體を離れて生存し得るもので、書は肉體に宿り夜は獨勝手に方々うろつく、其間我々は眠つてゐるのである。人によつてはそのうろついて居る精神を確に見たと云ふ、土臺棒にも箸にもか、

らぬ無茶な話である、『死』こは精神が永久に肉體こ離れるこゝだこ云ふ、一寸面白い議論ではあるが死んだ人の精神の溜り場所こ云ふものが無いのを見ても嘘だこ云ふこゝがわかる。

心理學の研究が進んで心身の密接離るべからざる關係が認められゝに及び、右の說は全然非定されるやうになつた、心こ體こがまるきり別のものならナゼ吾々は怒つた時に目を縱に切らすか口を歪めるか、ナゼ悲しい時に目から涙こ云ふ汁を出すか、ナゼ恐い時にガタ〳〵慄へるか、ソンナこゝの道理が一つも說明出來ないこゝになる。

そこで此迄卑しんでゐた肉體は

精神の住むべき宮殿

こしてだん〳〵尊重されるやうになつた。けれごもそれだけではまだ不充分である。モ一つ切り込んで考へて見るこ肉體は單に精神の方便こして貴重なのみならず、肉體それ自身の爲にも貴重である。凡て吾々の天から授かつたものは何一つおろそかにしてよいものはない、精神が大切なこ同じ樣に肉體も大切である。肉體を大切にして理想的の體格をしてゐる人はそれだけでゝも立派な人こ云はれやう。否人によつては單に其外貌だけによつて其人格の全豹を鑑別するものすらある。或茶店の主人はこんなこゝを云つてゐる、『こかく當世はよいうちの令孃令夫人が藝妓のまねをしたがるかこ思へば又反對に藝妓や娼妓なごは却て令孃令夫人の風體をまねたがるから着物や髮では見わけがつかぬが、併し歩き振や身體のこなしを見れば直ぐこわかる。殊に物を袂に入れる時に袖口から入れるのは藝妓で袖を手でわけて入れるのは令孃令夫人である。藝妓は纏頭なご貰つてクス〳〵こ袖に入れる習慣で、つひ懷手するやうにして入れる』こ云ふ。肉體は其程迄品性を決定するものである。女子にしても容貌の眞に美

しい人は大抵精神の美しい人である。中には妖婦と云つて美人にして恐しい奸婦もあるけれごもそれは佛者の所謂外面如菩薩内心如夜叉と云ふ奴で、一寸見れば妖婦の相がチヤンと表れてゐて眞の美ではない。又男子にしても聰明の顔と、間ぬけの顔と、意志の弱い口と、甘つたれの口と夫れ〳〵外貌に於てちがつてゐる。要するに身心の二つは至つて密接なもので、身體のどこかに故障が起きて胃が悪いとか腦が痛むとかすると心も亦陰氣に滅入つて來るし、心に何か心配事でもあると、身體も弱つてつひ喰べ物も喉を通らぬと云ふ樣なことになる。

そこで近頃は、

身體夫自身の爲からと、

精神と密接な關係があると云ふ側からと、

兩方面から體育々々と云ふことを、頻にやかましく云ふ樣になつた。

體育の選手は成績の劣等生

處で注意を要するは學生には學生の本分があつて何と云つても學德の修養に努むることを以て第一義としなければならないのに、野次馬と、名譽心と、血氣の勇とに煽られて學科も何も底のけにして運動競技の練習に熱中することは考へものである。無論全校で一人か二人しか無い選手で「乃公が出ないと學校の名譽に拘はる』と云ふやうなことで、引くに引かれぬ義理あひから熱中するのもあらうが、此が抑々考へものである。學校と云ふところは多數の學生に知德を授ける處であつて、少數の運動の選手を出すことにのみ熱中すべき處でない學力も人物も競技も何も揃つた選手が出ることは至極結構だけれごも、操行不良、學力劣等と云ふやうな學生で、唯其競技だけが上手と云ふので選手になるのは選ぶ學校も間違ひなら選ばれる當人は尚のこと間違ひである。

近頃の對抗競戯はいくらか體育その者の本旨から脫線してお祭騒に傾いて居はしないか、余は大に斯道の有識者に反省を促したいと思ふ。人生の爲の教育教育の爲の體育、體育の爲の競技、競技の爲の運動、運動の爲の選手なのに、教育其者の爲すべき多くを犧牲にしてまでも二三選手を出して其餘の者が應援に出かけてヤイ〳〵騒ぐと云ふのはドンナモノであらう、殊に其應援の仕方が甚だ下びて時には禮を失するやうなこともあるのは尚更注意しなければならないことであるさうした特殊の競技に熱中する程ならそれ等應援の人もなるべく平素同種の運動に興味を以て、暇があれば自身もやるやうにするがよい、今日鳴尾や、豐中のグラウンドでやる各種の演技をば多數世間の人は唯興行的に觀るものと極めてゐるのはよくない、自身も暇にやるからその見學に出かけてゐると云ふ風になつて始めて國民全班の體育勃興を實現することが出來るのである。歐米あたりの公園で午後の四時五時となると、めい〳〵ラケットを手にしてコートに集まり見る〳〵適宜な組が出來てドシ〳〵ゲームをやつて夕方になると家路に返ると云ふアノ式でやつてこそ眞の體育は勵行されるわけである。近來又家庭にピンポンが流行しかけたが此は悦ぶべき現象である。從來の邦人は家に居るときは何か食つてゐるか火鉢で煙草をふかすか、寢るかする位のことで、たまに道樂としてするこゝは碁、將棊、カルタ、双六、花合、トランプ皆衛生上あまりよくないものばかりであつた。それに比べるとピンポンなどは場所もとらず上品であり運動量もあり、至極よい遊戯である、此からの家庭では是非とも此種の設備があつてほしいと思ふ。

不斷の衛生

平素丈夫で自慢をしてゐるやうな人が存外早くコロッと逝き、平素病氣でいつもお醫者の手にかゝつてゐるやうな人が意外にも長命して恩賜の天盃を賜はつ

たりすることは世間にまゝあることであるが、此はつまり本人平素の衛生如何による。余自身にしても隨分其覺えはある、元來が頑健な方で隨分無理をしても何ごも無いこころから近頃大分胃をこわした、それにも拘らず夏など友人が來るごつひお相伴をしてビールを呑む、酒を呑む、コレはチト量が過ぎるがごと思ひつゝも『ナニ又健胃固腸丸の一服ものめば直る、マア四五日つらいめを悚へるまでの分サ』など高をくゝつて自分から病氣の豫算を立てゝおいて不養生をする、案の定あごで困る、『アゝこんなことならよせばよかつた』ごと後悔胃腸を撫でゝも一向役には立たない、若い時にはごうしても亂暴をする『君この杯を受けぬやうなことでは男ぢやないぞ』など言はれるごと『ナニそれしきの酒』ごつまらぬこころに勇氣を出して鼻から出さぬばかりに呑みつゞける、あごは二日醉や三日醉や、ひごいのは痔疾を起したりする。余の知つてゐる一青年は一夏大阪の町を歩いて一日に三圓何十錢がん氷のあらゆる種類を飲みつゞけたものがある、無論その冬はひごい冷え込みで三ケ月ばかり床に寢こんだ、一日の不衛生が三ケ月もたゝるのだから餘程氣をつけなくてはならない。又いつぞやコレラの流行した時人夫の中に『わしのからだは鐵のやうなもんだ、コレラなごこつちにうつつてくれいごいうたつて、アッチから御免被つて逃げる位のもんだ』なご、廣言して隨分無構に患者に接近した爲にトウ〳〵傳染して斃れたのもある、強いからごて油斷は出來ない、人間の身體は風前の火ごも思へば間違はない、少し養生の薪を加へて適當に酸素の供給を鹽梅すれば身體ごも云ふ火は益々燃ゑて盛になるけれごも、衛生ごも云ふ薪も補はず無闇矢鱈に風で煽つたならば次第弱りに弱つてバタ〳〵ご消えてしまふ。昔から、

腹八合に醫者入らず

ごも云ふが飲食はいつも此要領でたべたいものは八分通位でおくがよい、したい不養生もなるべくごめるがよい。

中には自分が好きでうまいと思つたものはきつと身につくからいくら喰つても構はないと云ふ人もある、此勝手な理窟も或度までは眞理だとは云ふけれども、いくら喰つても構はないなぞと云ふ道理はごんなことがあつても無いと思ふ。又古來我國民間の惡風に食べごくらをして、豆腐を十二丁喰うたのうぞんを二十杯喰つたの、餅を一臼あまり喰つたの、酒を三升呑んだのと云つて自慢にする者もあるが、此も身の大切を思はない馬鹿の骨頂である。

睡眠の心得

上手に働くものは又上手に睡ることが必要である、眠るのに上手も下手もあつたものかと云ふが、考へて見ると大變上手下手がある。元來睡眠と云ふものは心身一日の疲れを直す爲の比較的長時間の休憩であるから眠る以上は思ひきりグッスリ眠なくちや其効がない。即睡眠は量が多いよりも度が深い方と結構である。近頃アメリカでは睡眠廢止會なるものが出來てその會員は全く睡眠をしないことになつてゐるとか聞いたが、そんなことが出來るものなら人生五十年しかなくても百年の仕事が出來て大に結構たがそれは今日のこころでは到底不可能のことゝなつてゐるいくら少くとも子供は一日の三分の一即八時間、大人でも一日に七時間位は安眠しなくちや體がつゞかない。昔の偉人では一日の中三時間だけ眠つてあとはすつと働いたと云ふ人もあるけれども、それは特別に精力の勝れた人のことで吾々凡人としてはマア一日七時間の睡眠はとらなくてはならない、うまくやれば六時間に減ずる位のことは出來るかも知れぬがそれ以上減ずる譯には行かぬ。七時間が先つ定量で、それ以上長くする必要もないのである。量は多くても度が淺ければ量が少くて度の深い睡眠よりも惡い假に十時間の量を五度だけ眠れば五時間の量を十度まで眠つたのと等しくその相乘積は五十だけれども後の方は醒めてからの意識ははつきりしてゐるが前の

方のはさめてからもまだ睡氣がこれず、欠伸が切りに出て時に頭痛を感ずることもある。寢るこなつたら川獺のやうに人が蹴んでもたゝいても知らぬこ云ふ位に寢込むがよい。ガタツこ音がしても直ぐ目のあくやうなのは鼠の番や泥坊の用心にはよいかも知れぬが、上手な眠りやうこは云はれない。その上手な眠りを安眠こも熟眠こも云ふが之をするには晝間適當に活動して身體を疲らせなくては出來ない。

又睡る前に小說本や新聞の三面や其他雜念を刺戟するやうなものを讀むのは可けない。物を食ふのもよくない、そんなことをするこ寢てから物に襲はれたりこりこめもない惡夢がつぎ〳〵浮んで寢るでもなしさめるでもなしで神經が非常に疲れたりする。

ごうしても寢就かれぬ時には深呼吸をするなり、暗誦をするなり、時計の音をきくなり、雨だれの音をきくなり、何か機械的のことをするがよい。寢て讀書をすれば自然に睡くなるこ云ふので自己催眠術なご唱へて、枕元に讀みもせぬ書物を澤山並べる癖の人もあるが甚よくないことである。讀書をそのやうに輕く見るのも可けないし、書物の內容によつては益々神經を興奮させて何の役にもたゝない。寢行儀の惡いのは、女子のみならず男子もあまりほめたものでない。天の川のやうに宵に東に寢たものが朝見るこ南北になつてたり夏なご蚊帳の外へ轉がつて、危く階子段のこころで氣がつく人もある。余は受持の女學生にいつも『皆樣は朝起きる時いつ何時、誰にお蒲團をまくられても、差支ないだけの寢行儀の習慣をつけなさい。ひよつこおつかさんが起しに來て、マア此行儀はこ云はれるやうなことは決して無いやうになさい』こ云つてゐる。昔は勿論今でも物堅い家では女の兒の足を緩く縛り枕も外さぬやうに結ひつけて寢かす家庭が隨分ある。或人は寢行儀の惡い人は煩悶が多い人だこ云ふが、成程、其日の出來事で何か氣がゝりの事でもあるこ所謂轉輾反側してごうして

もあがく、スルト毎日の言行を謹んで後悔の種を增さぬこゝも亦安眠の秘訣である。

明日は遠足だこか、明日は此々の人が來るから是非こも早く起きなければならないこか云ふ時には眠る前に堅く四時になら四時に起きやうこ思ひ込むのであろ、此は一種の自己暗示である、スルト不思議にも其翌朝は大抵其時刻には眼のあくものである。さうでなく唯ボンヤリこ『あすは早く起きなけりやならぬ起きなけりやならぬ』こ思ひ〳〵眠やうこすればする程神經が高ぶつて眠つかれないものである、一旦『早く起きねばならぬ』こ思込んだらあこは何も思はなくてもよろしい、あこは早く寢つかれる法によつて成るべく早く眼を閉ぢるがよい。

人によつてはよく夢を見たり、ヒヨツト起きをしたりする。夢は五臟のつかれからこはよく昔の漢法醫が云うたここだが成程五臟の疲れも夢の材料になるこ

こもあるがそれ以外寢てゐる時の外部の事情にもよるここがある、胸に手を當てゝ寢てゐる人が心臟を突かれた夢を見たり、電車の音がする時火事の半鐘が鳴つてゐるこ夢みたり、花の香を嗅がされた青年が、花野の中を彷徨ふこ夢みたりするのは即それである。又夢は意識内の過去の現象で晝間は他の力の强い意識の爲に抑へられて無意識界に沈んでゐたものが夜になつて意識界がからになつて恐いものなしになつた爲に勝手氣儘に飛んで出る爲に寢てゐる當人は本當の事のやうに思ふ場合もある、否此種の夢が一番多い、過去に見聞したここ過去に想像したここそれ等が結びついてこんでもないここになつて出て死んだ人を夢に見たり遠い故郷の母を見たり試驗に落第だこ見たり飛行機に乘つたこ見たり伊太利のヴエニスの街を散歩してゐるこ見たりする。斯うはつきり後で思ひ出せる夢もあれば又ごうにも明瞭には思ひ浮ばぬけれごも何か知ら澤山夢を見たこ云ふここだけがボンヤリ思ひ出されるここもある。小供の時には寢て

る て便を催す時分にこゝは便所だこ夢みて蒲團の中で寢尿をしたり、足を曲げて寢てゐた爲に夢で走らうとしてごうにも走られなかつたり、又大人でも時には自分の死んだ夢まで見るが此こても矢張一度は自分の頭に浮んだことの再生に過ぎない。

ヒヨツト起きこ云ふのは今の變態心理學者の所謂睡遊に當る睡眠中ヒヨツこ目があいてムク〳〵こ起きて來る、瞳は据つたまんまで宛然氣狂ひのやうな相貌で、それから庭へ下りて下駄をつつかけて裏の戸口を開けて畑へ出て畔路を散歩してクルツこ一まはりして又もこの庭へ歸つて寢間に入つてグーグーこ寢る翌日お前は何しに起きたこ聞いても『ナニ僕が夜中に起きたりするもんか』こ澄ましてゐる、之も醫者の說によるこ神經が甚しく興奮してゐる故で無意識にやつてゐるこではあるがその動作だけは確で溝があれば避けもするし、石があればよけもする、危險はないがひごく體を疲らすから可けないさうである。

鼾聲は癖のもので注意で直らぬこ云ふけれごも此こて嗜み如何によつて或度まで は直される、昔の英雄は鼾聲雷の如しなご云うて鼾聲の高いのが膽の大きいのを示す形容語のやうになつてゐるが、實際臆病者でも大きな鼾聲をかくものがあるから、ちつこも當てにならない、一帶鼾聲こは寢てゐる間呼吸する空氣が鼻腔を通過してその時鼻腔が喉こ共鳴して發生する雜音であるから、寢る前によく鼻をかんで、空氣の通過するトンネルをよく掃除し、寢る時は體を眞直にして枕を正しくするやうにしたらあんなに物騷な音はしない筈だ。

さうかこ云つて鼾聲はさせないが口をポカンこあいて見るから愚物のやうにして睡る癖もよくない、此は多くは鼻に故障があつて始終口で空氣を呼吸してゐる人に多い、そんな人は競走(ランニング)には到底息が續かない……が、別に鼻が惡くもないのに口をあくこごは謹まねばならぬ。

それから寢る時に蒲團を頭からかつぐ人もあるが此も不作法なのみならず衛生

の上から見てもよくない、不潔な空氣、一旦吐き出した空氣を吸ふから。こんなことをする人はきつと唇のふちがただれたやうになつて俗に『烏の炙』のやうになつてゐるものだ。

又寢唾と云つて寢つてから涎のやうな唾液をタラタラと出す人もある、忌むべき癖だ。

又齒ぎしりと云つて睡眠中口をモガツカせて齒と齒とを摩れさせて牛が食みを返す時のやうな音をさせる人もある、此も忌むべき癖だ。

寢言と云つて寢てゐて無意識に物を言ふ人もある、昔の小說には寢言で自分の罪惡を口走つたばかりにつひその筋から繩目にかゝつたと云ふ話もある、又寢言を云つてる人にこちらから返事をしかけると幾らでも次から次へとしやべるもんだと云ふが著者にはその經驗はない。

要するに睡眠は個人生活中の極々隱微な私的生活に屬することであるけれども毎日數時間はいつもすることだたり各、翌日の活動に至大の關係のあるものだから從來よりも愼重に考へて

よく活く人はよく睡る人だ

と云ふことを念頭において成るべく上述の惡癖を避けるやうにしたいと思ふ。

身體各部の注意

敎育のあるか無いかは『手』の位置の定不定で知ることが出來ると云ふ、無敎育の人は始終手を前にやつたり、横にやつたり、後に廻はしたり、頭に上げたり耳を掻いたりするものだ、立てば自然と兩方に垂れ、坐ればキチンと前に組むと云ふのが手についての作法であるのにそれ以外の處にグラついてゐるのは『手癖の惡い人』と云はなければならぬ、女の人ではよくハンケチや袂の隅をイヂリ〳〵話するのもある、一種の嬌態と云へば惡いことは無いものゝ嚴格な作

法から云ふこ避けねばならぬ、手を清潔に保つこ云ふここも衛生上、作法上ご
ちらも大切である。手は大さう綺麗なものこも接すれば大さうきたないものこ
も接する、交際範圍の極めて多方面なものである。尾籠な話だが、便所に行け
ばお尻をもふかなくてはならぬ、食事の時には御飯をも運ばなくてはならぬ、
御歌會の時には主上に御見せ參らす色紙短册をも持たなくてはならぬ。さう云
ふ用事の多いものであるから、絶えず洗つて垢なごをためぬやうにするがよい
指の爪なんかもいつも短かく剪つておくがよい、物數奇に小指の爪だけ長く延
ばして耳かきの代用にするなご云ふここは面白くない、爪の間に垢をためるこ
こは絶對に止めたい。インクやチョークのこなはいつもこつてしまふやうにし
たい、食事前には必一度手を洗ふ習慣をつけたい。
鼻は腔内の粘膜から絶えず粘液が出て入つて來る空氣中の塵を吸ひこめる爲に
塵こ粘液このこねくが出來る、此が鼻糞こ云ふものである、退窟な時所作の

ない時鼻の穴へ指を突込んで此鼻糞をホゼリ出すのは金鑛を掘り出すより以上
に面白いこ云つたやうに絶えず鼻糞を採集しては丸藥を製造する人がある、最
も忌むべき癖である、又時こもなしに鼻をスースー云はせるここも見苦しい、
鼻柱をヒコくさせるここは何だか動物的で下品なものだ、鼻たけや鼻の下の
疣は隨分腦神經に關係があるこごが多いから愼重に取り除けねばならない。
眼は一代を通じて智識こ密接の關係のあるのみならず、顏面全體の中最美的代
表物である、近代的美人の要素は何こ云つても眼にある、昔は『顏雪の如し』
なご云うて色の白いのが七難を隱すこまで云うたが今はそれより以上に眼のこ
こをやかましく云うて、美人を形容するにも先づ『黑眼勝の瞳』こか『切長の眼』
こか云ひ出した、『眼千兩』こ云ふ諺はごちらから推しても本當である、それだ
け大切なのに今の學生なごは存外眼の注意を怠つて近眼の眼鏡がごしくふえ
て行く、女學生の中には眼鏡をかけるのが極りわるい爲に何こもないやうに裝

うてはゐるもの、視力を檢査してみると存外近視が多い。全體勉強が過ぎる爲かと云ふとさうでもない、折々机間を見巡ると蠹のやうな字を書いてゐる、五寸位の距離で本を讀んでゐる、窓からカッ〳〵と照り込んでも窓掛を引かうともしない、土臺むちやである、も少しめい〳〵氣をつけなければならない。用も無いのにからだをブリ〳〵搖ぶることも忌むべき習慣である。俗に之を貧乏搖りと云ふが成程貧相なものである。最後に一言すべきは女子の體育である、昔は

ホツソリスラリの柳腰

と云つて細腰折れんばかりの瘠せた女を美人のスタイルとしたものだが生理學上から云ふと柳のやうな細い腰は屹度胎盤が狹い、胎盤が狹いと安產の妨げになる、女子としての天職を盡すことが出來ない、そこで近頃は『本當の美人は臼のやうに太つたものでなくてはならぬ』なぞ云ひだした、此は確に科學的に

眞理であらう、けれども余をして言はしむれば腰ばかり臼のやうでも外が之と相應してゐなければ矢張美とは云はれない、全體がむつちりと充實した太り方をしてゐる女が眞の立派な體格で其上姿がよろしく顏の輪廓が黃金比例を保つてゐるのが始めて眞の美人と云へやう。こもかく體育思想が發達した結果こして美人の標準がちがつて來たのは結構である。女子の海水浴、女子の登山なぞ昔はテンデ話に出なかつたこと（尤も海水浴は男子の方でもさうだつたらうが）なのが近頃眞面目な研究の下に段々盛こなりつゝあるのはよろこばしい。女子のローンテニス、女子のランニングも亦日を追うて盛になるであらう、女は弱いもの美しいもの優しいものこばかり見て深窓の下に閉ぢ込めておく支那流のやり方は實際よくない、今度の歐洲の戰爭は女子にも男子こ同じ樣に社會的勤勞に參加するの能力あることを實際に證據立てゝゐる、女子の體力が國力打算の一半に計上される期も遠くはあるまい。殊に子孫の健否如何に重大の關係あ

ることを思へば
　健全なる女子は一國の國寶なり
こも謂ひ得やう。今の青年は結婚の相手を選ぶに容貌のことばかりは言うてる
ない、必ず其身長は幾何あつて其體格は強か弱かこ問ふ。女子の健康は確に簞笥
長持の十棹以上の價値がある。

第三章　漸進論

大の大なるを知ると共に小の大なるを知れ

泰山を見て高しこ云ひ、大海を見て廣しこ云ふ、此は誰しも同じである、大きなものが大きいこ云ふそれは當り前である、けれごも玆に云はうこするのはそれこは反對に小さなものが大きくなるこ云ふ道理である。

アルプスの山越をする道案内は時に旅客を顧みて大聲で話をするこごをこめるこ云ふ、わづかの音響で雪の片が崩れるこそれがもこゝなつて大雪崩こなり人も馬も千丈の谷底に辷りこんで白皚々の雪の下で凍死するやうなこごになるからである。虎列拉の黴菌が一粍だけあつてもそれがひろがつて全市街の住民をみなごろしにするこごもある。一匙のモルヒネは人を死に致し、五分の肉塊は

美人を醜婦こし、一本の針も延髄に刺せば致命傷こなり、一匹の小雀も耳に入りては獅子をも斃し、一本のマッチも滿都を焦土こ化し、一寸の檜苗も半天を摩する喬木こ聳える、小さいからこて侮つて居たならば飛んでもないここにな る。現に歐洲では列國兵火を交へて血眼になり、ヤッサモッサこ騒いでゐるが其始めは唯セルヴィアの一角で一個の青年が投げた一發の爆裂彈が源ではないか、雨滴地に入りて泉こ涌き、泉流れて谷川こなり瀑こかゝり小川こ流れ大川こなり大海こなつて狂瀾怒濤見るも物凄い勢こなるのは抑々何を暗示してゐるのであらうか。

目に見えぬ程の塵が一介一介又一介こ積り積つて地殻こなり、丘こなり小山こなり高山こ聳えて巍々然こし峨々乎こして威容人畜を壓するの趣を呈するのは抑々何を暗示してゐるのであらうか。

末遂に海こなるべき山水も

しばし木の葉の下くゞるなり

塵も積もれば山こなる

なご云うて此は皆小を積んで大を爲すこ云ふ一種の教訓を示してゐるものに外ならない、凡そ世の中のこゝは何一つ一足飛びに大變化をするものはない。

濡れ手に粟をつかむ

こ云ふけれごもそんなうまいこゝは此せち辛い世の中には先づ無い。大臣も始めから大臣でもなければ、大將も始めから大將でもない、大學者も始めから大學者でもなければ、大宗教家も始めから大宗教家でもない、長者も始めから長者でもなければ、大藝術家も始めから大藝術家ではない、皆チク〳〵〳〵〳〵こ蟻が餌を引くやうに毎日々々少し宛自己の運命を開拓した其 Little by little の積り〳〵つた結果になつたものばかりである。殊に今日のやうに社會の秩序がきちんこ定まつて來るこごんな偉いものでも一躍して高位高官につくこか百

萬長者になるこか云ふやうな僥倖は到底望めない。昔から出世第一こ謂はれる豐太閤でも若今の世に出て大將まで瀕ぎつけやうこ云ふのならば矢張尋常小學、高等小學を經て中學校を卒業してそれから士官學校に行つて卒業すれば見習士官をして少尉にして貰つて尚選拔試驗を受けて陸軍大學位まで行つてその上相當の戰功を積まねばならない、千なり瓢箪の旗印のやうなトン〳〵拍子で昇進することはまづむつかしい。金持になるにしても昔ならば紀の國屋文左衛門こか淀屋辰五郎こか云ふ風の成金は隨分譯もなく出たゞらうが今日ではさうは行かぬ、尤大阪あたりには近年鐵成金、株成金、絲成金、船成金こ云ふ各種の俄成功者が大分出たやうだがだん〳〵其人に就いて調べて見るこ皆それ相應の緣由があつて成功したもので

事の成るは成るの日に成るに非ず

こ云つた古人の語が成程こ肯かれる。株式のやうな投機的の事すらも今回一番

の儲け頭こ云はれる某氏なごは幼い時から堂島の小僧に住み込んで落米を掃いてゐる頃から修業を積んだもので已に此迄に百萬近くの蓄財はあつたのである而も機敏で勤勉で、朝はいつも市電の半賃の間に驅けずり歩いて半賃でない時は屹度徒歩で歩いてゐるこ云ふ。それだけの修養こ心掛こがあつてこそ始めて今回の成功を贏ち得たものである。

少し奇矯な例ではあるが大連視察をして來た人の話によるこ二百三高地あたりに日本から植ゑさせた樹木を支那人に世話をさせて、枯れたのは薪にくれてやるこになつてゐる、するこ貪欲一轉張の彼等は態こ樹木を枯らして早く薪に貰へるやうにこ云ふので巧にその樹木を枯らす、その枯らし方が頗る奇拔に綿密になされる、こ云ふのは外ではない彼等特有の根氣を以て樹木の間を歩きまはつて世話をするやうに見せかけて鎌や斧で以てあつちの幹をチクリこはつりこつちの根本を一寸つき毎日々々少し宛痛めて行つて人ならばなぶり殺しこも

謂ふべきなぶり枯らしをする、一時に掘り起すやうなことをすること直ぐそれこ知れるからチクリ〳〵こ少し宛絶え間なく痛める、それが積もり〳〵つて果は全山盡く枯木になつてしまつて、當局もやつこ氣がつき爾後は枯木になつても支那人にはやらないことにしたこ云ふ。惡いことではあるが、些細が產んだ大變こ云ふ一好例であらう。

韓非子の語に

千丈ノ堤モ螻蟻ノ一穴ヨリ崩ル

こあるは矢張之を意味したものである。然るに兎角東洋式の豪傑肌の人は彼の大功は細瑾を省みずこ云ふ諺にかぶれて『ナーニ大したことぢやない』『それしきのことに屈托してては駄目だ』

『燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん』やだ』『大丈夫々々々』なご、落つき拂つて得意こする者が多いが此が抑々失敗を招くの原因こなることに氣がつかぬのである。見よ漢楚覇を爭うた支那秦朝の末に當つて不世出の雄こ仰がれた項羽は實にその般鑑ではないか、彼はその幼時書を習はせられたが一向に上手にならず、又上手にならうこもせず

書は以て姓名を記せば足る

こ平氣でゐた、それから劍術を習はせられたがこれも一向はかぐ〳〵しく進まない、又進まうこも欲しない

劍は一人の敵のみ

我は萬人を相手ぢつて掛引自在の劍法を習ふのだこ云ふもんで澄ましこんでゐた、そこで後の史論家の多くは此語を引いて『彼が他日英雄たるの器量は此數語によつても其兆を認むることが出來る』こ云ふ、成程それに違ひはない、な

いが併し余の觀る所ではもう一つ『彼が他日爭覇戰に失敗した前兆も此言に表はれてゐる』と思ふ。若項羽にして習字や擊劍のやうな些事にまで氣をつける程の綿密な人であつたならば敵の反間の計に陷ることもなからうし鴻門の會の當てはづれもなからうし、まして垓下の戰に漢軍の爲に悲壯の最期を遂げるやうなことはなかつたらう、さすれば楚礎長へに安くして支那の歷史は其數百頁の文字を易へなければならぬことゝなつたであらう。小さいことゝ云つて輕蔑するのは大なる誤である、小さいことは此通り大きな事になるのである。

クレオパトラの鼻が若し三分低かつたならば世界の地圖の色は變つてゐたであらう

と、成程此も讀史上の一隻眼である。我朝に於ても若淀君の鼻が三分低かつたならば大阪兩度の陣は或は無かつたかもれず、勾當の內侍の鼻が三分低かつたならば湊川の合戰は足利方の敗になるかも知れない。

古今の大發明家、大發見家の多くは皆よく小の大なるを知つて微物に對する注意を怠らなかつた人ばかりである、林檎が枝から落ちる位なことは誰だつて見たらう、併しニユートンの眼に映らなければそれが引力の法則の現はれとは考へられなかつたらう。鐵瓶の湯が沸騰する位なことは吾々毎日見てゐる現象である、併ワツトの眼にとまらなければそれが蒸氣機關を工夫する手引とはならなかつたらう。針金の先にさした蛙が雷電に感ずることは極めて小さい出來事である、併フランクリンの眼に映らなかつたら電信機の發明は數世紀後れたかも知れない。一枝の果實が蒼海に漂流してゐることは小さな出來事である、併コロンブスの眼に映らなかつたならば亞米利加の大陸は永く發見されなかつたらう。

善に善い方面のみならず惡い方でも同じである。大不孝、大不忠、大泥棒、大

詐僞師こ云ふものは一朝一夕に出來るものではない。石川五右衛門も臍の緒を切つた時は善人であつたに違いない。自分の聽いた話に有馬郡の或村から掏摸の親方が出たこか、そして其人間の生ひ立ちを聽くこ七つの歳に人が一圓紙幣を二枚座側において容こ對談してゐる、するこ件の兒童がその横をスーッこ通つた……さてあこで何心なく紙幣を見るこ一枚しかない、をかしいな、たしかに二枚おいたものが一枚しかない、別に風も吹かず別に自分が他へ行つた譯でもないのに、紙幣が一枚足らぬ、まさかこ思つたが念の爲にその兒に『お前この一圓札を知らぬか』つて聞くこ、ニタ〳〵笑ひもつて『それならこゝに』こ云つて足の裏から出した、ごうしてそんなにうまくごまかしたかこ問ふこ、またもこの所に其札をおいて『かうやつて』こ云つてその傍をスーッこ通つて着物の裾で煽つて足の趾の裏へキユッこ插んでサッサこ歩いた、主客二人は驚いて『何こすればしかい兒ではないか』こ云つたが、其すばしかさが仇こなり段々人の

物を隱すこころに興味を覺え、始めは惡戲に一旦隱しても直ぐ出したものが後には永らく隱して出さなかつたり、果は隱し切りになつたりしてこゝのつまりは掏摸こなり段々功經て遂に親方こなつたものである。

そこで吾々が努めねばならぬこころは彼の蜀の照烈皇帝が後主禪に遺言した

善は小なるを以て爲さゞることなかれ

惡は小なるを以て爲すこと勿れ

こ言ふこころである。『これしきのこころ』こ思つても善いこころならば必らず實行するがよい。

人が人に遇ふ『お早う』こか『今晩は』こか暑い寒いの簡單な挨拶をする、先方も之に應じて『ヘイお早うさん』『ヤア今日は』『お暑うございます』『お寒うございます』こ返す、此が『人あひ』こ云ふものである、此だけのこころが云へなくこも別に人間こしての資格がないこ云ふわけではないけれごも、それを理窟ばつて

『お早うさん』ご云つてゐるのに『イヤ別に早くはないです、今時計は午前七時二十六分です』ご云つたり『今晩は』ご云つてゐるのに『ナニ今晩はごうです、今晩はだけでは主語だけあつて述語のない不完全な詞です』などご云つたり『お暑うムいます』ご云つてゐるのに『イヤ暑いこゝはござらぬ寒暖計を御覽じろ去年の今日は華氏の九十一度三分だつたのに今年の今日は華氏の八十九度七分です』ご云つたりしては決して『人あひ』かよいご云はれない。今日の教育を受けた青年子女の中にはご角く斯うした挨拶を形式的の辭令ご心得て輕く視るやうであるがそれがよくない。人が人を評するのはそんなに深く本人の起居動作を見て精密適確に批評するのではなく多くはその『一寸つき』のよしあし『人あひ』のよしあしを標準にして云ふ、そしてその批評が次から次に傳播して所謂評判ごなる『あの人は評判がよい』ご か『あの人はうけがよくない』ご か云ふその根據は何處に在るか ご云ふご つまり此時折の挨拶の仕方に原因してゐるこゝが存外多い、而も其が本ごなつて廣く全社會の信用程度が決定されるこなるのだから些細なこゝではあるが餘程謹まなければならぬ。

醫師の人について云ふご腕は充分にありながらあまり患者の家から歡迎されない人もあり、實力はそんなに無くても存外持て囃される人もある、そして其原因はごこに在るかご云ふご結局は此『お早う』『今晩は』の云ひ方如何にある。

大學を出る時には恩賜の時計まで頂戴した優等生が出てからあまり發展しないのに、おしまひから一番か二番ご云ふ劣等生が意外にも上下の氣受け宜しくごんノ〳〵ご鰻上りに昇進したご云ふ例もまゝあるこゝだがその原因の一つには必らずこの『人あひ』如何の問題が横はつてゐる。

新に人妻ごなつて嫁いだ花嫁は別して先方の出入や下部の噂の的になり易い、處が器量もよし荷も澤山ありご云ふ立派な嫁御がそれ程よく云はれないで器量は十人並で荷物も別に多くもない位の嫁御寮が却て『氣まへが優しい』ご か『氣

はいのよい人だ』とか『よく氣がつく』とか『大へん卑下してゐられる』とか言つて褒められるのはごう云ふ譯かとその本を探つて見ると矢張り此『お早う』『今晩は』の云ひ方如何が一大原因を爲してゐる。

銀行員でも會社員でも店員でも學校の教員でも實力は充分ありながら餘り人好きがしないで仲間から尊敬しられない人もあり、實力は何もなくて底が見え透いたやうな薄ペラが却てエライモノにされて立てられてゐることはよくある例である、そして實力のある人の不平はいつも『彼奴は游泳術がうまいからもてる』とか『才子だからだ』とか『仲々社交家だから』とか云ふ、所謂その游泳術、社交術、才幹なるもの、内容は何かと云ふと結局『お早う』『今晩は』の言ひ方の問題に歸する。

だから余は諸君に勸めやうと思ふ、何の方面に活動する人と雖先づ第一着に學ぶべきは此『お早う』『今晩は』を自然的に、輕快に言ふと云ふ事であると。『そんな挨拶位ごうでもよいぢやないか』と云ふ人があつたら、その人は到底ごうでもよいぢやないか的に扱はれる人以上にはなれない。

近頃『一日一善』と云ふことが大分やかましく奬勵せられて來て吾々も大變よろこばしいことに思つてゐる、此も亦小を積んで大を爲すもので、今日一善を爲し明日一善を爲し積んで已まなかつたならば一年三百六十五日には三百六十五善がたまるわけで十年たてば三千六百五十善五十年たてば一萬八千二百五十善これだけ積めばたしかに聖人である。

怠らず行かば千里の道も見む

牛の歩みのよし遲くとも

今茲に路を歩いて居ると二三間向ふの人がハンカチ一枚と五拾錢銀貨一つとをおとして氣づかずにスッスと行つたとする、その時後の人の採るべき態度は色色あらう、之を足下にふみにじつてスッスと通るも一法ならば、之を拾つて我

懐を暖めてそしらぬ顔をするも一法なり、金は拾つてハンカチはそのまゝにほつておくも一法なり、ハンカチもそつと路端の草葉の蔭に穴をほつて埋めておいて歸りに持つて歸るも一法なり、正規の手續を以て派出所に届けて出るも一法である。けれども此場合採るべき最善の態度は此等數種の方法ではなくして『モシあなた』と呼びとめて『これをお落しなさいましたよ』と知らせることに在る。此行は必ずしも善の大なるものではないけれども此親切を受けた相手はきつと心からなる感謝の辭と共に其を拾ふであらう、そしてその人自身も亦心からなる滿足を感ずるであらう。此自己滿足の感は更に他日第二の善で而も前よりは二倍がけも實行し難い善を行ふ原動力となり、二は更に四となり十六となり二百五十六となり幾何級數的の割合を以てより高くより大きくより廣くよりむつかしい大善をも實行し得る動機となるのである。

釋迦も孔子も基督もソクラテスも始めからの大聖人、大宗教家ではなかつた。釋迦には頓悟出家から雪山の苦行、諸國巡錫の難行があり、孔子も若い時には老聃に就いて禮を學び魯の役人となり諸國遊說の途につき陳蔡の野に飢ゑ桓魋の迫害に遇はれした、基督の生涯は悲劇の積習で其終焉も亦悲劇の最高潮であつた、ソクラテスも大路小路を逍遙して萬人を說破した、その說破の仕方が又頗開發的漸成的で決して急ぎはしなかつた。此等四聖は何れも幾多の難行苦行を經て遂に芳名を千載に殘したわけである。

そんな偉人でなくとも生存競爭の激しい今の世に處するものは是非とも忍從の德がなくてはならない、一時に大きなことをすることは不可能だから堅忍持久の覺悟を以てねばり強く長時間の辛抱を續けてチク〳〵と歩を進めるがよい。

人によつては

笑うて暮らすも一代は一代

泣いて暮らすも一代は一代

同じこゝなら笑うて暮らせと云ふ。それは結構である、けれどもそれが爲に浮世を太く短く一瞬の花火のやうなものにしてしまつては生の善なるものではない、細く長く牛の涎のやうに暮らすがよい。日本人で受けのよい英雄は誰であらうか、先づ源義經、豐臣秀吉、支那では秦の始皇帝、西洋ではナポレオンボナパード此等が萬人崇拜の標的となつてゐるやうだが、此皆人生を太く短く暮らした人ばかりである、其得意の時には傲奢華麗目も眩するばかりの派手な生活で其失意な時には火の消えたやうな見すぼらしいものであつた。豐太閤は辭世の歌に

露とおき露と消えぬる我身かな
　なにはのことは夢の世の中

と云つた。我身を朝露のはかなさに譬へたのは太く短い自分の生涯を自覺したものである。

之に反して彼の德川舊幕三百年の基礎を立てた家康はどうであらうか。彼は地位に於ては秀吉の部下であり、年齡に於ては石田、加藤よりも老いぼれであつた、けれども彼には成功上唯一の武器があつた、曰はく『忍從』ー

人の一生は重き荷を負ひて遠き道を行くが如し、不自由を常と思へば不足なし(家康遺訓)

と觀じた。此唯一の武器を以て、今川家に人質となり具に酸苦を嘗めた。今川氏の滅後は更に彼の短氣者の信長に仕へた。信長が本能寺で光秀に弑せられた頃には彼は最早海道一の弓取とまで推奬されてゐたのだから最うそろ〳〵覇を唱へてもよささうなのにまだぢつとこらへて信長の子信雄を援けて小牧の戰に參加した、其戰が局を結ぶと更に秀吉に客將として其大政を扶けた、此長い間の辛抱が少し宛安固な地步を築いて遂に三百年太平の洪圖は成就されたのである。余の知人の某新聞記者に三頭の狗が居た、白は一番愛せられ赤之につぎ黑

は寧家の子供の憎まれものであつた、どこへ行くにも『白々』と持て囃されてゐたが春さきにどこからともなく野良犬が來て誘ひ出してどこかへ連れて行つたきり歸らなくなつた、子供は仕方なくこんどは赤犬を馴つけて肴の骨、御飯の殘り凡ての寵愛は皆彼に集まつた、處が同じ年の秋一日郊外の咬み會ひに參加してその赤犬が大怪我をしキャン〳〵〳〵〳〵と泣き續けてとう〳〵その翌日亡くなつた、そこで子供は仕方なく『黑なと』と云つて『なと』つきで相手に仕出した、馴れては可愛い人のあばたが靨に見える道理で此黑犬も段々と子供に愛せられて、山へ行くにも『黑』と呼ばれ野に遊ぶにも『黑』と呼ばれ、どこへ行くにも『黑々々』と連れられて曩に羨しがつてゐた肴の骨も御飯の殘りも凡ての富みと榮譽とが黑一身に集まるやうになつて現にその家の門にいつもピン〳〵尾をふつてゐる。……そこで余が思ふには此三匹の仔狗を人に譬へると白は信長で赤は秀吉で最後の黑は家康のやうなものだと。

人の一代は重荷を負うて遠い道を行くやうなものとはよくも譬へた詞である。家康自身の一生は就中最もよく此譬へに當てはまつてゐるが、自分は更に詞を易へて人の一生は瞬間にかける x だと云はうと思ふ。瞬間×x＝人生此方程式も亦强ち無用ではない、吾々は一瞬々々に瞬間と云ふ小さい輪をつくつてその輪と輪とを繋いで一生と云ふ鎖を作るのである。所が鎖と云ふものは中に一つでも輪の弱いのがあつたらばまるきり弱くなつて其用を充たすことが出來ない、五十の輪の中一つが切れたならば全部廢つて仕まふ。人生も亦さうで五十年の中一年でも惡生活があつたならば此が大なる弱點をつくることになる。一瞬毎に善言美行を積み累ねて茲に始めて善生涯の鎖が完成するのである。所が世間には若い時隨分放蕩に身を持ち崩してゐたが中頃改心して懸命に働いた爲に晩年を幸福に暮らす人も隨分ある、そして人は之を觀て『人間一ぺんは道樂をして來ないと駄目だ』と云ふ、此が大きに間違つた考へで、私に云はせれば

曩の幸福な人が若しも若い時から眞面目にしてちつとも放蕩しなかつたならばもつと〳〵幸福に暮らすことが出來たのである。何も一度墮落してそれから轉迷改悟して而して後勤勉實直になると云ふ風の迂遠な路を採らなくてもよい。道樂は決して成功の前提要件ではないのである。三角形の頂點に達するには二邊を迂回せずとも一邊によればよいのである『道樂をせねば駄目だ』なぞ云ふのは此二邊の迂路によらうと云ふ連中の言である。

佛蘭西人と日本人とは一寸性格が似た所があつてまるで薄鍋のやうに火にかけると直ぐシヤーンと燒けてくるが一寸おろすと又直ぐに冷えてしまふ、即一時的の發奮、一時的の努力と云ふやうなことはよくする國民だが永持がしない。何か立派な修養談でも聞くと大さう感奮して『ナンデモおれもあゝ云ふ風に』と力むがさて一日二日はその氣でゐても三日目位からそろ〳〵ゆるみ出す、之を

三日坊主

と云ふ。

修身の教授でも受けると言ひ聽かす都度成程々々と肯いて迄傾聽して實際自身も明日から實行しやうと思つてゐるが教場を出たらテニスのラケットを握ることと共にそんな心は雲散霧消してしまふ、之を

感心上手の行ひ下手

と云ふ。でなければ已に此迄百遍も二百遍も云ひ聞かされてゐる善いことを行つてもつと〳〵立派な人間になつて居なければならない筈である。青春の男女は殊に感情が熱烈だから物事に觸れて感奮興起することが多い、が之を持續することが困難である。一時に百度の熱を以て感激することはしても一時に一度宛百時熱を持ちこたへることが出來ない、此では到底大成の見込はない。

くれ〳〵も云ふておくが大きなものは始めから大きいのではなく、小さな物が次第々々に集まつて大きくなるのである。大善は小善より始まり大惡も亦小惡よ

り始まる、大の大なるを知つて小の大なるを知らざる人間は到底向上發展の見込がない。

第四章　學問論

學問の必要

一、小僧入用　但年齢十五才以上十八才以下學力高等小學卒業云々
一、店員入用　教育は中學卒業以上云々
一、會社員入用　但中學卒業ト同等以上ノ英語ノ素養アルモノ云々
一、車掌運轉手見習募集　年齢ハ二十三才以上二十八才以下高小卒業視力確ナルモノ云々

こ何種の募集廣告を見ても必らず一條件に計へられるものは教育である。

『○○によいお孃さんがありますが一つお家へお世話しませうか』『そりや有難

いですな、して其はごこ出ですか』『無論女學校は卒業してゐますが、ごここ云ふこごは確に聞いてゐません』

など嫁を娶る話の一條件になるものも矢張教育である。此はホンの一例に過ぎないが今日何種の方面にしても學問教育の必要でないものはなく、之のあるものはドシ／＼有利な方面に廻るし、之のないものは段々不利な方面に廻される此も優勝劣敗の一つであるから仕方がない。曾余の郷里に二人の幼な友達が入營した、甲は體格も立派なり氣だても眞面目なりなか／＼立派な軍人であつたが惜しいことには眼に一丁字がない。父に早く訣れて家事の手傳の爲に尋常小學すらも卒業し得なかつた、そこで折角三年勤めてヤット一等卒で歸つて來た。乙は中學三年まで行つて中途退學をした位だから無論その小隊での學者であつて、休みのあひまには同僚の手紙も讀んでやれば代筆もしてやる、その爲可なり隊での巾がきいて前の甲こ一緒に歸る頃には伍長にまでなつて居た、學問の

有る無しで腕の筋が二つも違つて來た譯である。

余の敎へ兒で同じ家から通つた姉妹があつた、家は醫師で町では信用の厚い舊家である。入學した年の夏不幸にして其母なる人は數多の子女を遺して病死した。自然姉娘は家事の爲に手の引けることが多くてこう〳〵二年の一學期で退學した。四年の月日が流れるやうに暮れて、其間に更に繼母が來て繼母の子が出來して家も隨分にぎやかになり二人も大分嵩高くなつた。ごちらも嫁がせねばならぬが親こしては先づ年上の姉から貰はれたかつたに違ひない、處がごうしたものか媒人は妹ばかりくれ〳〵つて云うて來て『姉の方では』こ勸めても『イヤ年のまはり合はせが悪いやうで』こか何こか體よくはねてしまふ、變な話である。容貌はごちらも同じやうに美人系のタイプで氣だてもごちらも似たりよつたりでお負に姉の方は頭がよくて正級長を勤めさせた位だのにこ思つてる中こう〳〵妹の方が早く婚約が整つて神戸の或工場主の處へ嫁ぐことに極つた。處が先方では姉をホリおいて妹を先へ貰ひ受けることだからごうも氣の毒だこ云ふので又更に奔走して自分の知人の緣故に當る高等商業出で岡山縣人で當時は長崎の三菱合資會社詰の社員こなつてゐる人に推薦した。先方では妹が女學校卒業生なら姉も無論同じ學校の卒業生だらうこ一人ぎめにきめて二ツ返事で承知をして『是非よい話にしてくれよ』こ云ふ、そして尙念の爲めだからこて余が奉職校に宛て、本人の品行學力體格なごについて照會して來た、こころが當校では中途退學者だからいくら卒業生名簿をくつてもちつこも其名が見つからぬ、係の人は仕方なく『そんな卒業生はない』こ返事して來た。サア大變だ『高等女學校を出てゐなくちやごうも貰つても困るだらう』こ斷り手紙が神戸へ舞ひ込む、神戸の家は直ぐ余の宅へ主人がやつてきて本人在學の有無を問合はすごなつて本人の運命は隨分危くなつて來た。余は在りのまゝを云うて儲補つて『成程卒業はしてゐませぬが、アノ娘なら卒業したこ同じだけに才幹もあれ

ば能率もあります、名を捨てゝ實を取られる方ならきつと歡んでお受けになるでありませう。一般から申して高等女學校卒業と云ふことは今日嫁ぐ人の必要條件には違ひありません、けれども中にはホンの學校を出たと云ふ名ばかりで手紙一本碌にはかけず家事も裁縫も便りない手際のものが隨分あり、それに比べれば女學校の卒業證書はなくとも、〇〇子さんなどはズツト〳〵立派な嫁御でせう、唯形式的な名義の爲に此緣談がザラになると云ふのだつたら私は本人の爲にも殘念だと思ひますが先方の爲にも遺憾だと思ひます、でどうか御返事の一部に私の申したことも御書き加へになつて最う一度先方の反省を促されたいと思ひます』と云つておいた、其人は悅んで歸つた。十日ばかりたつと手紙を起して『お蔭樣でうまくをさまりさうです』とあつた。その年の十一月の初旬に姉娘はめでたく長崎に嫁いだ、ついで同月の末に妹娘も神戸に嫁いだ。二週間程たつと長崎から手紙が來て『ごちらも大さう悅んでゐる』とのこと、相前後して東京から繪葉書が來た、妹さんの新婚旅行先からなのであつた。東西ともに無事圓滿なやうで至極結構である、併しそれはホンの當座のことで、いつかは何かはゴテ〳〵が起きはせぬかと觀てゐるが今以て無事圓滿である。

儲餘談が長くなつたが今日では嫁入一つするにしても教育のない人は外にいくら條件が揃つてゐても二の舞を舞はれるのが普通となつて親達は眞に學問の必要を悟つた譯ではないが、マア嫁入の荷物の二棹三棹にも代ると云ふので一枚の卒業證書を取らせやうとするやうになつたのは、モ一つ感心し兼ねるが之を以前に比べたならマア〳〵結構な傾きと謂ふべきである。

但斯う云ふ人に勸めたいのは

華ヲ去リ實ニ就ク

と云ふことである。何も卒業證書に價値があるわけではない、アンナものはいくら上等の酉の子紙でも一枚二十錢出せば得られる。一枚二十錢の證書がごう

して二棹三棹の代りが出來やう、出來るのはその證書の面に記載されたる實内容の在るこゝである、實際それだけの德を身につけるこ云ふことが貴いのである。

水にも流れず火にも燒けぬ寶

今年も水害で苦しんだ阪神沿線稗島の富豪某氏は、田地や畑地なごを幾ら持つてゝも此通り水害に逢うては助かりつこはないから息子はごうあつても學問を身につけさせるこ云つて東京にやつて法科を卒業させた。今は其息子は某代議士こして政界のみか天下に其存在を認められてゐる。世には隨分お金をためた り田地を買つたりしてそれを樂しんでゐる人があるけれごも此等は若ものこゝがあるこ一番荷厄介で第一水に流されぬやう、火に燒けぬやうこの用心に忙はしく人は金錢の番人、田地の保護人こして汲々してゐなければならない。之を智識が我身をかばひ我身を保護してくれるのに比べるこ大違ひである。

學問させるよりは田地を買はせやう と云うた伯父

余の從兄に余こは一つ年上で體格も立派なり成績も優良なのがあつた。鄉里の柏原中學を出た時本人の希望は大學に在つたものを父なる人卽ち余から見れば伯父に當る人がごうしても聞入れない『マアよう考へて見るがよい、高等學校から大學までやる費用は大したものだ、それで出てからごうなるか百圓足らずの月給取り位になつたつて到底算盤に合ふ話ぢやない、其上サア卒業こ云ふ間際になつてから斃れるものも隨分あるさうだ、ソンナ富籤のやうなことをさせるよりは大學へでもやつたつもりで其だけの學資で田地でも買つてやる方がズツト役に立つ』こ云つてごうしても承知しない。そこで仕方がないから村の小

學校へ代用教員で出てゐたが、ごうしても勉強がしたくてたまらぬこゝろから無理矢理にねだつて早稻田にやつてもらつて英文科に入學してヤット中等學校の英語教師になつてゐたが、勸める友だちがあつて今は大阪に出て某會社の事務員こなつてゐる。其勸めた友達は當時樞要の地位に在る人だがもこの中學時代の同窓で其後法科大學を卒業した人である、余はその人こも知り合ひである。二人のこゝを思ふ毎に從兄にして若し大學を出てゐたならばモット有力な地位に立つことが出來やうにこ惜まぬこゝはない。

實に今日の世の中で學問のある者でなくては頭が上らない

書物を多く讀むよりは實力の養成が大切

併いくら學問萬能こ云つても名ばかり形ばかりの學問は何にもならない、兎角今日の學生は形ばかり名ばかりの學問を追究するの弊があつていけない、そこで學問こ云ふものは机の前に座つて書物を讀んでゐる時でなくては出來ないこのやうに考へてゐる。此が又大きな了見ちがひで苟くも活眼を開いて活智識を得やうこ思ふものは單にページの上に眼をさらすだけが能ではないこゝを思はねばならない。ジャンジャックルッソーの語に

世界は大學校

こある。自分の研究心さへ旺盛であつたならば路傍の一草一木も驛頭の一紙一葉の掲示も皆採つて見聞擴張の資こすることが出來るのである。學問々々こ云つたつて唯徒に書物の讀みだめをしてちつこも實務に益するこゝろのないやうな學問は今の世多くの場合に於て望ましくない。尤今の世の中はいくらか肩書かぶれの世の中で准訓導よりは訓導がえらく、訓導よりは校長がえらく校長よりは教諭がえらく、教諭よりは中等學校長がえらく、中等學校長よりは

直轄學校の教授がえらく、並の教授よりは學士がえらく、學士よりは博士がえらいと思ひつめてゐる時世であるから官僚界はまだ〳〵駄目かも知れぬが實業界の方は追々と
實力本位
になりつゝあつて、高商出の青二才よりも小僧上りの番頭の方が幅をきかすと云ふ風になつてゐる。將來は何れの方面も此と同一筆法で實力本位の世態が來るであらう。

ノートの整理をうまくせよ

學生のノートを見ると點汚書き半分のやうなものが間々ある。ノートは所謂智識の寶庫ともなり索引ともなるもので元來は教科書以上、參考書以上に大切にすべきものである。彼の天明の大火に遭つた小澤蘆庵も餘のものはほりおいてもノートはぬ鈔錄本だけは之と云つて人にも頼み我身も持つて太秦に避難したとある浪六の五人男を見ても失火に遭つた書生がノートだけを大切に持ち遁げたところが寫してある。それだのに今の學生は此ノートを何とも思つてゐない。其整理の仕方が頗る亂雑である。先づ其大小の不同と云つたらない、或時は菊版形のを用ひ或時は四六形のを用ひ、さうかと思ふと三越のお伽繪本大の小さな形を用ひ同一學生のノートにして大小の區々なものが隨分ある。そして其ノートの文字の亂雑なこと、まるで一定のスタイルを爲してゐない。楷書あり行書あり草書あり、飛んでもない略字があるかと思へば飛んでもない誤字がある、その上文章の拙いこと云つたら到底之を書いた本人すらも二度と讀むに堪へない程の惡文がある。斯の如くして今日の學生はノート眞個の使命の那邊にあるかも知らず又ノート其物の整理が學習上應用上最大切であると云ふことをも知らない、此は大に反省を要すること、思ふ。

試驗勉强

試驗勉强と云ふことが殆學生の年中行事のやうになつてゐる。青い顏をして消燈の喇叭が鳴つた後も蒲團にもぐり込んで蠟燭をつけて夜通し復習をする、誠に熱心な學生のやうにあるが實は平素ずるけてゐたと云ふ證據物件を並べてゐるやうなものである。試驗前學生の燒け鹽梅のきついことを見ると吾々學校と云ふところは

ごくだうの節季働の標本製造場

ではあるまいかと思ふ。そして此等の徒は試驗が濟むとキヨロリとしてノートも教科書も押入の奥深くホリ込んで歌ふ、躍る、騷ぐ、飮む食ふ、九時頃舍內を巡視して見ると丸で百鬼夜行のやうなもので舍監も腹立たしいと云ふよりは寧噴き出したいやうな光景である。余は思ふ、眞の學生と云ふものは受驗の後でソロ〳〵其科の復習にとりかゝるやうな者でなくてはならないと。

世の中に絕えて試驗のなかりせば
　生が心はのごけからまし

なごふざけて成るだけなまけやう〳〵と心がける生徒は他日社會に立つて振りまはさうとする武器を成るだけ鑄ぴるやうに努めてゐるやうなものだ。

『試驗勉强でもせないよりはした方がましはましだ、僕が夜前さらへた物理は三つも當つたではないか』と云ふものもある。『博物の先生はいつも前日に花畑へ行つてこつて來た草花について口答試問をするから、今晚花畑へ行つて鋏のあとをしらべれば明日の問題は大抵見當がつく』と云ふ學生もある。なか〳〵感心な着眼で機敏だと褒めたいが彼等は試驗の何たるを解せないでまるで投機事業か何ぞのやうに心得てゐる。平素の學力はどうでもよい試驗の時に一點でも餘計にとれゝばよいと云ふ考へらしい、之を

點取蟲

こ云ふ。此蟲は米喰ふ蟲より以上に困つたものである。

過度の勉強もやめるがよい

勉強は無論よいこことだけれごも自身の精力不相應な勉強は徒に百害あつて寸益もない。ごこの學校にでも百人に二三人はよくあるものである。テニス一つも碌々ようしないで便所へ行く間も一心こつ心に勉強してをつて儲愈々の段になつて答案を見るこ、ごれも此もスカばかり書いて殆ご零に近いやうな採點で、始終注意を受けてゐるこ云ふ風の低能がよくあるものである。元來吾々の神經系統こ云ふものは折々は休ませないこ彈力がなくなる、いつも張りつめてゐるこ、サア張らなけりやならぬこ云ふ段になつてからプツ〳〵リ切れてしまつて神經衰弱こか神經痛こか云ふものになつてしまふ。よしそこ迄悪くならぬにしても、頭腦が甚不明瞭こなつてトツチンカンなこごばかしを云ふたり書いたりする樣になる、だから幾ら氣が〳〵りでも折々はゆつたりこ休んで神經を緩ませる必要がある、でないこたこひ精力の盛な人でもしまひにはきつこ弱つて來る。

識の轉換に工夫せよ

あまり同じこごを繼續するこ誰だつて退屈する。余自身の經驗で言うて見ても先づ夏冬の休暇なごズツト宅に居るこ隨分時間は裕にこれる、そこで休暇には必何かの著作をし何等かの讀書をするに極めてゐる。で、休みでも平素こ同じ位に起きて手水を使ひ冷水摩擦を終るこシガーを一本燻らせて机に凭り、それから原稿紙を延べる。二十五字詰二十行の美濃半紙形なのを擴げて前日練つた想をスラ〳〵こ起稿する、十五枚位までは一息に書くが其頃ホッこする、ソコでコーヒーか茶を啜つて又一服吸ふ。ソレでも直に同じ仕事を續けるこごはよくない。不利益だからこんごはテーブルに凭つて椅子にかけて讀書をする、菊版ならば五十頁、其外の中本、小本ならば百頁を度こして讀み續ける。それが濟むこ庭

下駄をつゝかけて園内を逍遙する、しまひに亭の處へ行くこゝそこには今月號の雜誌がおいてあるからそれを讀む。それから歸つて來て少し子供をあやしてやる、其中晝食こなる。午後は又十枚起稿して二十五頁讀んで、それから仰臥して翌日の起稿分を練る、時に他の書を引用すべきものはそれをも捜して紙捻を插んでおく。それが濟むこ新聞をよむ、外出する用のある時は外出をする。次に手先のこゝをする、ノートを閉ぢるこか本の表紙のいたんでゐるのを直すこか新に買入れた書物を圖書目錄に載せてレッテルを貼るこか云ふ風のこゝをする。それから必要な手紙を書いて、それが濟むこ好きなヴアイオリンを引く。こゝマアザツこ斯う云ふ風に變化をつけて生活して居るので長い休暇も決して退屈もしなければ疲れもしない。吾々の意識は時々その働く方面を換へさへすればいつも愉快に活潑にやり續けて行くこゝが出來るものである。だから諸君は學校で時間割を制定せらるゝが如く家庭に在つても自分自ら時間割を制定して此意識轉換法をうまくせられたらよろしからう。

時は金よりも貴し、時は生命それ自身なり

何をするにしても先だつものは身體だ、金だこは前に言つたがそれより以上に先だつものは時間である。如何な機用人でもちつこの時間も費さないで或事をするこ云ふこゝは出來ない。別して學問なごは時間を惜まずヂックリこおちついて修めなくては身につかない、始終せか〳〵こしてまるでプラットホームに居るやうな氣持では到底物にならない、多くの日月を費して一意專念に心がけて始めて之を身につけるこゝが出來るものである。そこで學生にこつては何が大事こ云つても此時間程大切なものはない。如何にせば有意味に經濟的に時間を費すべきかは最深重に考慮を要する問題である。にも拘らず古來我邦ではお金の經濟、品物の經濟、勞力の經濟こ云ふこゝについて彼此やかましく云ふに拘らず、此時間の經濟については餘りやかましく云はなかつた。今も尙地

方時がある。地方時こ云つても何も氣象臺で云ふそれこは違ふ、たこへば

大阪時間
京都時間
名古屋時間
長崎時間

こ云ふ風の名稱で正い時よりは一時間も二時間も懸値のある地方時である。金錢の方で一圓を使ふにはごう云ふ風にしようかこ云ふ豫算は可なり精密に考へるのに時間の方では一時間を如何に費すべきかこ云ふここをそれ程深く考へない。金錢は一度失つても又之をこりかへす道があるが時間は一度失つたら取かへしがつかない。

日晷一たび移れば千載再來の今なし

である。よく人は

年に一度のお正月だから遊ばうこ云ふ。ソレデハ年に二度くる日があるかこ云ふに決してそんな日は無い、ごの日もごの時も年に一度しかこない日や時ばかりである。實に時間の流れは流水よりも確實に流れ〳〵て已まないものである、流水は時に瀨こなり淵こなりして遲速があるけれごも、時間の流れには瀨も無い代りには淵もない。

歲月は流るゝ水の如し

こ云ふけれごも、水は之を堰きこめる柵があるが歲月には之をこめる柵を設くるの道がない。

飛鳥川あすこ云ひては流しやる

月日にかくるしがらみぞなき

此に於てか烏兎匆々の歎は誰にも起きるものこ見えて

昨日こ云ひ今日こ暮らして飛鳥川

流れて早き月日なりけり　（春道列樹）

なぞ云ふ。

光陰ハ矢ノ如シ一度去リテハ又返ラズ

こも云ふ。

併し今日の學生は此等古人の述懐を唯上つ辷りに聽き流して何か『歳暮の感』こ云ふやうな題で文を作らせるこ如何にも殊勝げに『あゝ今年も斯して暮れぬるか吾人茲に於てか烏兎匆々の感轉切なり。讀むべき書の多くを殘し、爲すべきこの多くを殘して舊年は逝き新年は來らんこす』なぞ書くが偖そんなに云ひつつある瞬間に於て已に無意義に時間を空過して平然こしてゐるから何もならぬ又來年の暮になるこ又同じやうなこを云うて又同じやうにブラリ〳〵こ暮らす。烏兎匆々を歎く心こ、ブラリ〳〵する心こが全く無關係に在るのだから困つたものだ。近頃ロシアの或文學書を見るこ

汝のあらゆる瞬間をして無限の價値ある内容を持たしめよ

この意味の語があつた。あらゆる人間がごこの誰よりも貴く瞬間を費すやうにするならば實に立派な生涯で、年が暮れやうが、身が老いやうがちつこも悔いるここはないであらう。

年の功

こ云ふここを以て物識りの唯一條件のやうに考へてゐるものが多いが、いくら年をこつても無意義に年齢を重ねたこ云ふだけでは串柿を餘計喰つたり雜煮餅のより多き消費者こ云ふだけで外に妙はない。

朝ニ道ヲ聞カバ夕ニ死ストモ可ナリ　（論語）

こあつてよしや短命であつても其生涯を有意義に過した人は確に善生涯こ謂ふここが出來やう。

それだのに今の學生は『明日は日曜だけれぎも此々の用事で登校せよ』なぞ云ふ

こ『イヤー』こ云つて火災保險の重役が大火の號外を手にした時のやうな苦りきつた顏をする。『今日は誰先生がお休みで隨意復習』なご云ふこ手を打つて悅んでゐる。『作業の都合で午後は缺課』なご云ふこ萬歲まで唱へる、眞に氣の知れぬのは此等の學生である。時間を空過することが出來るこ儲けものでもしたやうに悅んでゐる。まるで自分を馬鹿にして下さいこ願書を出してゐるやうなものである。

習字で

青年重ネテ來ラズ、一日再ビ晨ナリ難シ、時ニ及ンデ當ニ勉勵スベシ、歲月ハ人ヲ待タズ　（陶淵明）

こ書いたり、讀本で

少年老イ易ク、學成リ難シ
一寸ノ光陰輕ンズベカラズ
未ダ覺メズ池塘春草ノ夢
階前ノ梧葉已ニ秋聲

や

謂フコト勿レ今日學バズシテ來日アリト
謂フコト勿レ今年學バズシテ來年アリト
日月逝ケリ歲我ト延ビズ
嗚呼老イタリ是誰ノ愆ゾヤ

なご習つても爪の垢ほご其語の意味を味はへやうこはしない。西洋人は

時は金なり
延引は時間の賊

なご云うてゐるが實は金のやうな安價なものに比すべき者ではなく

時は生命それ自身なり

こ云つた方が適切である。

第五章　感謝論

感謝生活

明治の女流歌人こして人も知る稅所敦子は京都生まれの人で鹿兒島の藩士に嫁いだ。久々で郷里に歸省するこになつたが、此鹿兒島こ云ふこころは大へん人情の剛健殺伐なこころで別して他所ものを排斥する風が盛で、こりわけ敦子の姑さんこ云ふのが町内で名だいの邪慳ものであつた。さなきだに荒い風でも獸はしい京美人があの意地惡の姑の處へ往つてはこても長持はしまいこ皆人片唾を呑んで注視してをつた。處がいよ〳〵先方へついて同棲するこになつてから何日たつても何ケ月たつても別に不平さうにもしてゐない。姑は案の定邪慳にあたつて『オイこの御飯のおさらへをたべておきな』なご云ふが唯『有がたうございます』こ云つて快く頂戴をする。『お前には此は過ぎる、こつちの惡〳〵着物を着なされ』こ出されるこ又『有難うございます』こそれを着て平氣で澄ましてゐる。『お前は家にゐてらくをし過ぎてゐる、明日からはコレ〳〵の仕事をあてがつてあげませう』こ云はれるこ此亦『ありがたうございます』こお承けをする。ごんな嫌味を云はれてもごんな難題を持ち出されても唯『有難う』の一本調子でつき通すもんだからしまひにはこう〳〵姑さんが根負けをした。『何たるこちへ情のよい嫁であらう、モウ今日は怒るか明日は頬を膨らすかこぢつこ待つてゐるのに一向怒りも頬を膨らせもしない、ごうもあきれたもんだ』こ思つたが、段々その心掛に感心して、遂にはその德に心服した。『ごうも感心な嫁もあつたもんだ、此迄のここは皆コッチが惡かつた、此からはモット大切にしてやりませう』こ思つて、それ以後は打つて代つて優しくあしらふやうになつたから敦子も大そう悅んで實の母子よりまだ睦まじく暮らした。後に藩主島津侯

からのお召で敦子は出仕しなければならなくなつた時にも姑は大さう別れこむながつて『嫁をこられては片腕をもがれたも同前だ』こ歎いたこ云ふ。此は今からあまり遠くもない明治の女流の一佳話である。

『有がたい』の一念を以て生活し得る人は確に幸福である。ごうせ我身にふりかかつた運命である』『有がたくない、ごうも不平でたまらぬ』こ云つたこて、それで苦痛が無くなるではなし、矢張り『有難うムいます』で承けた方がよいのである。

不足を云ふなら廣い世の中誰一人こして不足のないものはない。贅澤を云ふなら此亦きりのないこことである。

思ふここ一つかなへばまた二つ
三つ四つ五つむつかしの世や

隴を得ては蜀を望み象牙の箸を手にしては金殿玉樓を望み酒池肉林を望み長夜

の遊宴を望み次から次へこ氣まゝが出て果は宇宙の富を傾け盡しても一人の望を充たすこことが出來ないやうなこことになる。

人間は心の持ちやう一つで不平こもなれば感謝こも成る。富豪の立派な邸宅を見てはエゝ癪に障る、彼奴等は學識も何も無い癖に先祖のお蔭でコンナ生意氣な眞似をしやがつてこ思ふ。電車にのる、隣の人が立派な服裝をしてゐる、エ自れつたい、人の苦勞も知らぬけにそんな高いものを着て、その面に相應するかいチットはをれに遠慮もしたがよいこも思ふ。料理屋のかごを通る、酒肉の香がプーンこ鼻をつく、キャッ〳〵こ黄な色の聲が聞えて美妓舞妓も大分侍つて居るらしい、チョッ一體ごこのウッケ者だらう、晝日中に散財なごしてからにこも思ふ。一日ズッこ齷せく働いて家門につく頃は早や新月が軒の柳に笑つてゐる、朝は暗い中に起きて夜はまた此通り遲くなる、そして得る處の報酬は幾らかこ問へばお向ひの番頭の一番下位のものだ、馬鹿々々しいな、一體上

に立つ人間はごんな眼で吾々を見てるんだらうこも思ふ。重役は朝十時頃にノッソリやつてきて煙草二三本ふかして社の食堂ですきなものを食つて午後の二時にはツイこ出る、それでゐて年末になるこ大部分の配當をこつてしまふ、自體腰辨を馬鹿にしてゐるこも思はれる。斯う思ふこ人間は愚か、周圍に見るもの觸るものが皆腹が立つてならない。

何だこの道はいくら雨あがりでもアバタの婆ッ面をしてからに。ナンダあの烏はよその屋根にこまつてカア〳〵も無いもんだ、烏までが人を馬鹿にしてやがる。チョッ何たる邪慳な風だい、オレの安もの、帽子をたゝせやがつた、エイ剛腹なこなる。

之に反して始終感謝の念を以て生活するものは三度の食事の箸をこる度にも父母の恩、主君の恩、天地の恩の有りがたいここを思つて戴いて食べる。ヤア立派なお屋敷がある、吾々もかうして自由に拜見しながら大手をふつて通られる

こは何こ有がたい時世になつたもんだな。イヤお隣の人の着物はシュー〳〵音がしてピカ〳〵光つてる、何こ云ふのか知らんが大分高いだらう、アンナ立派なものを着なければ體面が保てない人はサゾ窮屈だらうな。有難いここには吾吾此職服一着で日本ごこへでも通る立派なもんだ、値段はたつた十六圓こ五十錢、それでゐてかうして相並んで車中の客こなれるこ云ふんだから實際電車は有がたいもんだこ思ふ。料理屋のかごを通る、酒肉のかざがプンこする、キャッ〳〵こ美人らしい金切聲が聞える。有がたいもんだ、アンナ輕薄な聲の女に追從笑ひをされてコンな料理屋でなくては自分の慰安を求めるここの出來ない人もあるのに、自分はそんなここをしないでも眞面目に働きさへすれば家に子もある妻もある、そして心からなる言葉こかしづきこを以て慰めてくれる。今の大盡は誰だか知らぬが何れ妻子のない人か、あつても始終家庭に風波の絶間のない人に違ひないこ思ふ。

朝に星を戴き、夕に月を踏んで歸るやうな劇動をし續けても、有がたいナ、斯うして毎日世の中の爲、家族の爲に働くことの出來る身體を持つてゐるのは誠に神の惠であると思ふ。重役がノラリクラリして居つても、有難いなア、我々かうして定められた仕事を忠實にしてをりさへすればよいのだが重役となるとさうは行かぬ、寢ても醒めても心配事ばかりして、人からくさうに思はれるが吾々は責任と云ふことについてはズツト〳〵薄いのだから氣樂なもんだ、と斯う云ふ風に思つて見ると自分の周圍の見るもの、觸るものは皆悅樂の資を供せないものはない。流る〻水も吹く風も我身を慰むる歌かと思はれ、囀る鳥も飛ぶ蝶も我心の精の拔け出でた舞かとばかり悠然たる氣持を以て此大自然の母の懷裡に出入することが出來るのである。

不平は一面に於ては向上進步の母であつて、之あるが爲に人は現在に甘んぜず益々賢く益々善く益々高尙なる人格に達しやうとするものである。近世倫理思

潮の中心となつてゐる自我實現說もつまりは現在の小我に不平があつてより高き大我や眞我に達しやうとする學說に外ならない。さう云ふ方面ならばいくら不平があつても、其餘弊が人身攻擊的の結果にならないからよろしい。が、さもなくして徒に下等なる物質的の目的物を追求して之が得られないと云つてブツ〳〵こぼすと云ふに至つては卑劣極まる根性と云はなければならない。彼の七福神の隨一たる惠比須樣は頭に大きな頭巾をかぶつて

上を見な

と云ふことを示してゐられる。人間の慾にきりが無いのだから、おしまひには フロレンスの川水で湯をわかしてロッキー山の薪をくべて巴里の石鹼で洗つて 金剛石の上へ雲母でも張つた湯槽につかれないからなと云うて呟やくやうにも ならう、全體不平なんて云ふのは陰險な嫌味の多い惡德で、最男らしくないものだが又女らしくもない。男子の不平家は大へん卑劣なやうに見え女子で不平

家はちつこも優し味がないやうに思はれる。何か心に蟠りがあるんならアツサリこ關係者に言ふがよい、然し言ひ出すこが出來ないやうな不平なら自分の言ひ分がそれだけしか無いものこあきらめてだまつてしまふに限る。いくら言はなくても社會のここ云ふものは大抵公平なものだから方面々々で大抵權衡が保たせてあつて一人が突飛にうまいこも出來なければ一人が非常に虐待されるこ云ふこともないものだ。かう達觀した人には詰らない不平なご起りさうな筈がない。

又羨望こ云ふのがある、此もあまり感心しない。人が成功するこ羨ましいこ思ふ。人が可い着物を着てゐるこ羨ましいこ思ふ。人がおいしいものを喰つてるこ欲しさうに覗いて居るなごは全然乞食根性である。人は人我は我こ高を括つて餘り人のここを羨ましがらぬがよい。殊に誤まつた羨ましがりやうは就中最いけない。人が大臣になるこあの人はうまいこをしたこ云ふ。人が大金儲けをするこ彼奴は仕合せがよいこ云ふ。まるで富籤にでも當つたかのやうに云うて、其成功を生ずるに至るまでの苦心慘澹を想はない。此は一番淺薄な羨ましがりやうで又相手に對して甚しき無禮である。まるで苦心をして試驗に合格した人に對して『通りましたさうですネ、えらい僥倖でした』こ云ふこ一般である。

嫉妬につきて

羨望はまだよいこして、それが惡く〳〵發達するここんごは嫉妬こなる。嫉妬は羨望の相手を妬むここで、人之を有し我之を有せず而も我到底之を有し得るの見込なきここに由て生ずる不快感の擴張したもので、文字から云ふこ女の疾こ云ふ字が嫉で女が石のやうに堅く感ずるこ云ふのが妬である。成程女は嫉妬深いものだこは古來相場が極つてゐるが、甲女の前で乙女のここを評して

あの人はごうもよく條件が揃つてゐますネ、容貌はよし氣まへはよし、お家柄なり、財産家なり、そして學校の成績は優等なりてなこことを言つて褒めて甲女の樣子を見るこ稀には何氣なく本當に左樣でございますネつて云ふ人もあるが大抵は『さうですネ』こ云つてあまり浮かぬ顏をする『さうでしやうか』つて稍不贊成の語氣を洩らすす。一歩進むこ『ですけれごあの方だつて家では隨分我儘ですわ、ホラいつかあすこの女中が云つてましたよ』こ骨頭して極力棚おろしをする。此は一面に於ては女の美點であつて女には先天的に他を排して自分一人愛せられやうこする傾向をもつてゐるその天稟のあらはれだこも聞いてゐるけれごも、何も相手が褒めてゐるここに間違ひのないものまでも、殊更に非をうつ必要はなからうこ思ふ。余も長らく女性には接してゐるが大抵のイザコザはいつも此嫉妬の角が中心になつて起きてゐるやうな心地がする。今後の女子教育は今少し女子に他を容れるだけの雅量を養成しいたものだこ思ふ。

嫉妬は女子だけこ云ふけれごも決してそんなここはない、男子にも隨分燒く連中がある否男子の嫉妬は女子のそれに比べてずつこたちの惡い、ズツこきたないのが多い。女子の嫉妬には幾分可愛らしい處があるが男子の嫉妬こきては鼻持もならない。我國の中級團体こも謂ふべき銀行、會社、學校、官衙の裏面史をしらべたならば同僚が色々の方面に於て暗闘してゐるその中心を爲すものは大抵この嫉妬である。他人の順當な發展を見て自分の腑甲斐なさの恥づべきを知らず、ごうも癪にさはるこ云ふので排斥運動を始める。正々堂々こ主義主張を戰はすだけの勇氣もなければ立場もない所からコソ〳〵こ寄るこ障るこ蔭口をきいて果は生徒をそゝのかしたり保護者をたづねたり有力者に取入つたりして成るべく自分がしたこ云ふ跡が知れぬやうに目的を達しやうこする。此の種

のもくろみが現今學校のみならず多くの方面に流行してゐるやうであるが、イヤハヤ見下げ果た根性である。

川に臨んで魚を羨まんよりは歸つて網を結ぶに若かず

で、それが不平なら自分も進んで修養してそれと同じやうになるがよいのである。それをするだけの努力を拂ふのも嫌なり、拂ふことしても到底自己の能力では實現がむつかしい、むつかしいからよす、よしただけで平氣で居れるかと云ふこ、ごうも氣がわるい、そこで何とか相手を非難することはないかと鵜の眼鷹の眼で見る。見られることを知つてるから相手の人は尚のこと注意して缺點のないやうに努める。結局不潔な感情を起して自分の人格を下けただけが損である。卑怯な人でなくては出來ない藝當である。が社會には此種の人が存外多い、そして其嫉妬が或程度までは成功することもある。所謂讒誣中傷は此嫉妬の卵から孵つた雛である。併そんなことをして自己滿足が得られる人な

ら到底永久に社會の信用を繋ぐことは出來ない。少し心のある人から見れば中傷する人の人格を疑ふことは極つてゐる『アノ人は何故あんなに某君のことを非難するのだらう、誰かに態々聞かれたこともなるべく辯護的に紹介するのが紳士の道だのに故意にわざ〳〵人の惡を吹聽するのは何ぞ爲にするところがあるのだらうか』と直ぐその心中を讀んで見やうことかゝる。何も世間を知らない坊ちやんなら直ぐに本當にするかも知れぬが、少し社會の實際を知つてゐる人だつたら、きつと攻擊した人を疑ふに違ひない。現行法律の上に於ても名譽毀損や誣告は明に有罪と認めてゐるのに尚斯の種の人の絕えないのは返す〴〵も遺憾である。

人を惡く言へば自分の價値が上るやうに思ふ人があるかも知れぬが此が亦大なる誤である。思ふにその人の心には

某には斯樣々々の缺點がある

然るに自分にはそんなことは一つもない
だから此事を話せば聽手は少くとも自分をば某以上に評價するであらう
この感情論理が働いて居るかも知れぬ。此は極めて幼稚な考である。丁度小學校の生徒を叱るに『わたしだけぢやない、誰さんなんぞはモットひどいことをして斯々のことがあります』と云ふのと好一對である。
又人間には座興的の野心家があつて、衆人稠座の席で何とか言つて自分の言うたことを皆が面白がつてドッと笑つたら得意がつて、いつもぞう云うたら人が面白がるだらう、ぞう言へば一座の者が自分の言に傾聽するだらうと云ふことばかりをつけねらつてゐる、そして人の身の上噺と云ふものは各人の最注意を惹くものである。そこでさう云ふ人は好んで人の噂話をする。それも正眞其まゝでは印象が淺いと云ふので自分で針小棒大にして大袈裟に傳へる。佛者の所謂妄語戒を破る人の中には隨分こんなの人が多い。心ある者が之を聽たなら

ば『アノ人はマアよくもあんなに人のことをしやべられたもんだ、自身があれと同樣に喋々せられたら餘りよいこともなからうに』とも思はうし『居ない人のことゝ云ふとあれ程盛に名立噺をする位だから吾々も若し居合はせないとしたら彼はどんなことを云ふやらわからない、兎角あゝ云ふ人には拘はりをつけぬに限る』と思つて敬遠主義をとるやうにもなる。
職業で口の多いものは女髪結、散髪屋、幇間と云ふやうなものだが、賢い細君はよその惡口をしやべる髪結は好まない。お園ひものゝ妾なんかに限つてよく噂噺を持出す髪結ひを悦ぶものである。

ほとゝぎす人も言葉の多ければ
品少しこと一聲ぞなく

實際口數はきゝ過ぎるより無口すぎる方がよい。

雄辯は銀なり沈默は金なり

なぜ云ふのも此戒である。

而も人の噂なぞになると次から次へと傳染するもので『此は此塲限りにして下さい』『ハァよろしい』と引受けた人が又外へ行つて『此は此塲限りに願ひます』と云ふ『ハァよろしい外へは洩らしません』と云つて聽いた人が又外へ行くと『實は此塲限りですが』と前置して同じことを語りだす、そしてその度毎に多少の利子をつけて話が大袈裟になるものだ。

語るなと人に語れば又人に

語るなぞと語る世の中

それだからめい〳〵心がけて詰らぬ話の本家とならぬやうにし他から聞いたことは聞いたまゝにして自分に參考になることは自分一人反省し考慮するに止めておくやうにしたらよい。

短氣は損氣

不平が消極的に黴菌のやうに發生すると前云うたやうな羨望、嫉妬、讒謗、中傷なぞの惡德となるが不平が積極的に而も突發的に迸るとそれは怒となる。所が此怒と云ふ感情は極めて動物的で下等な意識である。先づ怒つた時の人相を見るがよい、どんな美人でも美男子でも決して見よいものではない。眉がツンと立つて目が縱にきれて鼻をモガ〳〵させて唇をピリつかせてまるで狼か獅子に近い。

怒は無識に始まりて後悔に終ると西洋の諺にもあるが實にその通りである。ひどい肝癪持になると戸のあけたてが思ふやうにならぬでも腹を立てゝ戸を蹴とばしたりする。蹴飛ばした戸が破れたりすることあとで直すに物の一時間もかゝつてあゝこんなことをせんでも可いものをなぞ云つて悔む。

此頃よく大阪の市營電車が停電することがある。時には長時間かゝることもあるが大抵は一分か二分位のことであるから氣永に車中に落ち着いて居ればよいものを『エゝぢれつたい下りるぞ』なご云うてブリ〳〵して歩き出す。物の十間も行き過ぎぬまにチリン〳〵動きまあすご云ふ『ヤアしまつたこんなのなら乘つて居ればよかつたに』なご云ふ人が折々ある。

急がずば濡れざらましを旅人の

あごより晴るゝ野路の村雨

腹が立た時は深呼吸をせよご云ふ人があるが此も一方法である「ナニ貴樣がツ」こもう喉の奥まで出て居ても「こゝだ」ご思つてグッご唾を嚥み下して靜に二三度深呼吸をし下腹へ力を入れてチャンご體を構へるご大抵の怒は抑へられる。又腹の立つ時は鏡を出して自分の顏を見よごある。誰もゐない自分一人の居室なごではそれもよからう。怒ご云ふものが如何に下品なものかご云ふここがわ

かつたら到底怒る氣にはなれない筈だ。

今は心齋橋筋で大きな店主こなつて日本屈指の商店を經營してゐる老主人はもご其家の番頭上りであつた。主人のあごを尋いで始めて同業組合の宴席へ出た時に或一人がみんなの前で罵詈雜言を吐いて、しまひには盃に唾を吐いて『貴樣たちの酒は之で結構だ』ここまで辱めた。流石の某氏もムカ〳〵ツご腹が立つて餘ッ程なぐつてやらうかご思つたが『イヤ〳〵さうではない、あの人の言ふ通り我々の身分でこんな旦那樣の席へ列るここの出來るのは有がたい譯だ、マア〳〵辛抱せい、見る人は見てゐやう』ご胴を据ゑて、だまつて悠へて居つた。彼の抵抗しないのを見て一部の人は痛快だご感じたものもあつたやうだつたが一部の人は非常に同情して『流石は先主に見込まれただけある』ご褒めた。此が彼の信用を博する第一歩で、ドン〳〵取引範圍が擴張して遂に今日の盛大を致したものである。そして往日盃に唾した人は今も同業の會ある毎に列席する

が、もこよりこちらはいつも正座で向ふは遙の末席であるが時にはつひそばに座を取らねばならぬこともあるこ、先方では良心に恥づるこころがあるこ見え て長座に堪へずして辷るやうに外へ行くこ云ふ。

堪忍は無事長久の基怒は敵こ思へ、勝つことばかり知りて負くることを知らざれば禍其身に及ぶ（家康遺訓）

淺野長匠頭は短氣で損をした隨一であらう。吉良義英の無禮をじツこ怺へて居れば何こもなかつたものが『オノレッ』こ刃を抜いたばかりに五萬石の知行は召取られ我身は切腹して藩士はバラ〳〵になつた。恐らく

短氣は損氣

のよいモデルであらう。織田信長も短氣で身を過つた一人である。家來の光秀が折角苦心をして家康の接待を充分にするこ『彼は我家來分であるのに、コンナ丁寧なことをしたのは不都合だ』なご云つて鐵扇でなぐらせた。コンナこさへせなかつたら本能寺の厄は免れたであらうに實に惜いことをしたもんだ。

此等二人のみならず總じて昔の若殿樣には怒りツポイのが多い。何ぞこ云ふこお手討が始まるからそれが恐しさに家來はヘイ〳〵ハイ〳〵で仕へては居るもの、コンナ主君は決して部下の心服を買ふことは出來ない。若樣は馬鹿樣だ位に思つて腫れ物にでも觸るやうに、事なかれ主義でやつてをつたに違ひない。昔なら夫で通りもしたらうが今の時世では上に立つ程怒つては損である。誰も人が心服しなくなる、果は之をからかひたくなる、だからごんな短氣な人でも大臣になるこ無闇に怒らない。大臣でなくても怒つて得することは決してない。

爭はぬ風に柳の絲にこそ
堪忍袋縫ふべかりける

執念深い人は蛇の性

怒を一時に發せない人はそれを貯蓄してこんごは『怨恨』こ云ふ情にする。即

其時ムッこはせぬがそのことをいつまでも記憶して『あいつはいつかいく日にかう〳〵云ふことをおれにした憎い奴だ』こ考へる。考へるだけならまだしもだがそれが直ぐ『いつかは返報をしてやらう、復讐をせずにはおかぬぞ、呪つてやるぞ』こ云ふ心に進む、そして何ぞその機會がないかこ始終につけねらつてゐる。此が即『執念深い』こ云ふものである。昔はよく『丑時參り』こか云つて怨のある人を祈る爲に夜の丑三つ時に蠟燭を頭に立て、白い着物をきて宮樣に參つて境内の樹に祈り釘を打つこ當の仇は病氣になるか怪我するか、さもなくば不意に死ぬるか何かはよくないことになるこした迷信もあつた。又文學でも源氏物語の六條御息所は生きながらその生靈が光源氏の本妻の葬の上に乘りうつつて安産を妨げたこ云ふ風のことがよく出てゐる。思ふに一面から見るこ執念深い人は感情の濃い所謂濃性の人で自分の味方に向つては滿腔の愛をそゝぐ人なのだから善い方面に向へば結構だが悪い方面に向ふこ飛んでもない極端

なことをするから危險である。殊に女性は一般に『あきらめ』の悪いものである

あきらめましたよごうあきらめた

あきらめられぬこあきらめた

あきらめが悪いからつひ愚痴ッポクも成る。いつまでも死んだ兒の年を算へてゐる。いつまでも盜まれた着物の話をしてゐる。さう云ふ風だから心に怨みが根ざすこいつまでもそれが失せない。女の髪の毛が立つこ蛇のやうになるこ云ふが蛇こ女こ幾らか似たところがあるやうにも思はれる。

彼の有名な謠曲日高川の淸姫は其最好例である。戀しい夫の後を追うて日高川まで來て見るこ生憎水嵩增して渡しの船もこだえしてゐる。一遍の思ひは執念の大蛇こなつてナミ〳〵こ荒波をわたり件の寺に來て見るこ夫は鐘の下に隱れてゐる。それこ知つてグル〳〵こその鐘を卷きつけて戀の炎でその鐘を熔かしてしまつたこ云ふ事實有つたか無かつたか詮鑿は拔きこして此程女の執念をよ

く具体化した好例はなからうこ思ふ。

併今日の時世にあつては法律の制裁も道徳の制裁も可なり細かく發達して大抵のことはそれに一任しておけば相當の捌きはつけてくれるから自ら我こ手を下して復讐を計るやうなことはなるべく避けるが可い。本當の立派な處を云ふなら前の某店主のやうになるべく他人の無禮を善用して他日自由に復讐し得る境遇になつた時なるべく寛容の態度を以て彼をして彼自身に羞ぢしめるが一番高尚である。文明の世では昔のやうな親の仇、主君の仇を討つことを嚴禁せられてある、まして自身の怨を晴らすこ云ふやうなことは尚更及傷沙汰には出來ない。何か怨めしいことがあつたこしても『オノレッ』こ一撃の下に仆すやうな亂暴は出來ない。さうかこ云つて毒藥を盛るやうな陰險は尚惡德であり法律も許さない。ダイナマイトを仕掛けて殺すやうなことは尚不都合である。こころがコンナ手段によらないで腹いせをしやうこするには自分も相手以下の人格に成り下つて陋劣な方法を執らなければならない。そんなことに苦心する間があるなら積極的に自分の知德を增進することに努めた方が得策である。執念そのものは人間通有の性こして已むを得ないこしても成るべく之を善用して彼我共に有形無形の損失を招くやうな愚は避けねばならない。

感謝生活の對象

感謝生活の中、殊に著しい對象は君、親、兄弟、朋友、夫婦、師長である。各人は日々此等の恩人に對して感謝しなければならない。

我々が若も今の露西亞のやうな國に產まれてゐたならばごんなに苦痛であらうこ思ふこ我國の人民こなつてゐることがしみ〴〵有がたく思はれる。我々が若し我國古代の人民であつたならばごんなに不自由であらうこ思ふこ大正の聖代に大君の御惠みを受けつゝ文明日進の今日に遭うてゐることがしみ〴〵嬉しく思はれる。

忠君愛國義勇奉公
の精神は此感謝が流れて出る自然の美泉である。此を說くことはあまりに知れきつたことで、吾々の言ふを俟たずして國民の日々實踐躬行しつゝあることである。

親の恩は洪大なこと此も昔から樣々のものに記されてある。今こは昔こは孝行の仕方はちがつても精神に於ては變りはないのである。親孝行な人は必其心掛正しく職務に忠實で其周圍の人に接することこ圓滿である。つまり孝の一德を中心にしてそれを全うしやうこ思へばごうしても正直眞當でなくては出來ないからである。近頃西洋の個人思想が入つて來て我邦在來の家族道德を壞さうこする傾があるのは嘆かはしいことだが親子の間なごはなか〳〵ソンナ傭入れの思想で滅茶々々にされるやうな淺墓なものでないこ思ふ。

兄弟は他人の始まり

なご云うて近頃は又兄弟同士訴訟沙汰を起したりする人もあるが實に馬鹿げた話である。自分こ略年代の同じい提携者こして親より以上に兄弟は賴もしいものである。高が知れた財產のわけ前位なことで此麗はしい關係を壞すなごこは何こ云はうこ餘り褒めた話ではない。

夫婦は一心同躰

こ云つてつまり生涯の利害を緊密に共にする自我の二分の一同士である。

夫婦喧嘩は犬でも喰はぬ

が豚でも食はぬ。夫婦喧嘩をして得の行くことは一もない、マア銚子の口が缺けたりお櫃の底がぬけたりする位のことである。

其あした亭主一人で飯をたき
寢室ではお女房さんがスネておこつて起きて來ないこ云ふこころである。云へば云ふここはお互に澤山あるにしても喧嘩口論では夫婦の同棲は出來ない。

朋友相信じ

と教育勅語にも仰せになつてゐる。今のやうにお互が家郷を離れて遠くへ出てゐる時には

遠くの親類よりも近くの他人

で、別けても朋友の援けに俟つことが頗多い。友達仲たがひをして絶交するなど云ふことはよくせきでなくてはせぬがよい。多くの場合に於ては相信ずるべきである。

我肉躰は父母之を授け我精神は師之を授けるので人は師の導きによつて道の東西を辨へるのである。だから昔は

弟子七尺去つてその影をふまず

で先生ときては影法師すらもよそける程に尊敬したものだ、それに近頃の學生はストライキまで起しかけた。實に今昔黑白の大違ひである。

吾々は日夕此等恩を受けたる人々に對して其厚意を感謝しなければならない。自分一人で何もかもやつて來たと云ふやうな顔をしてはならない。

朝な〳〵箸とる毎に忘るなよ
御恩を受けし親の惠みを　（道歌）

第六章　克己論

已れに克て

人間こは欲に手足のつきたるものぞかし（西鶴）

こ云ふ。成程人間誰しも欲のないものはない、生まれ落ちるこ乳房に喰ひついて乳をほしがる、少し日がたつこ何でもかでも口に入れたがる。尚大きくなるこおもちやをほしがる、お菓子や饅頭や羊羹やカステラをほしがる。學校へ行き出すこ本がほしい筆がほしい紙がほしいこ云ふ。青年子女になるこもつこ複雑な欲を起して色々のものをほしがる。何も欲のないこ云ふ人でも花を見て死にこもないが病かなで毎年々々花を見たいこ云ふ欲だけはある。人間の感覺は下から數へて早いも

の程下等で動物的で遠い程高尚で人間的だこ云ふが成程口に伴ふ食物の欲は生まれるこ直ぐ發達するが極めて下等なものだ。次は鼻、物を臭ぐこ云ふここは稍上品だが矢張動物的である。その證據には野蠻人程鼻は鋭敏で或種の土人は殆ご犬こ同樣によく香をわけるこ云ふ。次は耳、此になるこ餘程人間的で美妙な音樂を聞いて樂しみ得るのはごうしても人間に限る。猫や鼠が音樂會を聽きに行つたこ云ふここはつひぞ聞いたここがない。それから目こなるこ最高尚なもので吾々知識の門戸こ云つてもよい。他の動物にも視覺はないではないが人間程遠くを視るここは出來ない。烏がつひそばへよるまで逃げないここや魚がタモ網に追ひ込まれるこころを視るこごう考へても近眼こしか思はれない。だから欲の中でも見たいこ云ふ欲は一番高尚で、讀書欲、觀察欲なごは寧ろ勵したい位である。聞きたいこ云ふのも之に次いで高尚で、つまり見聞を廣めるこ云ふここは多くの場合望ましいここである。

己に克つと云ふことは己の下等なる欲望に打ち克つことである。つまり我々の頭の中は欲と欲との戦争場であつて其中下品な欲に勝たせる人は人品が下るし上品な欲に勝たせる人は人品が高尚になるのである。例へば此頃の朝五時頃になるとフッと目が明く『アヽもう五時の笛が鳴つてゐる起きて夕の帳合の續を片づけたいナ』と思ふ、此はよい欲である。ヒョッと外へ顔を出すとゾッと冷たい風が吹く『アヽいやだもつと此暖い床にもぐりこんで居りたいナア』と思ふ、此は悪い欲である。そこで起きよか起きまいか、と兩方の欲の戦争が始まる。枕元の煙管を引寄せてポンポンはたいてゐる時はその戦の方に酣なる時である。サテ思ひきつてサッと起きる人はよい欲に勝たせた人で、又横になつてグースカ〳〵と睡る人は悪い欲に勝たせた人で、此様にして人間は朝ムックリ起きるから頭の中で戦争が始まつてゐるのである。此に十圓のお金があるとする『此で大島紬でも買つて着物を一着作りたい』と思ひ『此で參考書を買つて勉強したい』と思ひ『此で一日京都へ遊びに行きたい』とも思ひ『此で國の母に何か珍しいものを買つてやりたい』とも思ひ『郵便貯金にしておかうか』とも思ひ『金箱の奥にしまつておかうか』とも思ひ『貯蓄債券を買つておかうか』とも思ひ『すきな風月堂の羊羹を買つて思ふ存分喰つてやらうか』とも思ふ。此等樣々の欲望の中何れか一つを極めるこころにその人の人格があらはれるのであつて、料理屋なぞへ散財に行かうなぞ極める人は最よろしくない。

所が人間凡夫凡婦のなさけなさにはサウ〳〵いつも高尚な欲望が勝を占めて下等な欲望が負けてばかりは居られない、之を自然にほつておくと、ごうしても下等の欲望の方が勢力が強い、ウッカリすると段々人品を下落させる。そこで『克己』と云ふ心掛によつて其下等な欲をウンと抑へつける必要があるのである

百萬の敵を破るは易く心中の敵を破るは難し　（王陽明）

と云つて人間此心中の大敵を挫くだけの勇氣のある人は餘程見上げたものである。

自己辯解

人は動もすれば心に自己辯解をする。色々と尤らしい道理を考へて下等な欲に勝たせるに都合のよいやうなことを思ひつく。早い話が酒呑みがさうである。『酒は不經濟だ衛生上にも害がある』と云ふことは百も二百も承知してゐながらソラ晩が來る『イヤ、ホツコリした一寸一杯』とお燗を云ひつける。ソラ客が來た『客があるのに酒も出さぬと云ふことがあるか』と家人を叱りつける。何のことはないお客よりは主人がガブ〳〵やつてお客樣は立派な鰹節だ。モウ寢ると云ふ前に寢酒、朝起きると朝酒、よそに行かうとする前に草鞋酒、何かよいことがあると祝ひ酒、何か惡いことがあると自暴酒まで呑む。そして『ナニ

モ酒を呑まんからつてそれだけお金がたまるでもなし、飲みたいものは飲み食ひたいものは食ふが可いサ、よしやお金が溜つたとて墓に金塚もつくられず呑め呑め』と云ふ風なことを言つたり考へたりする。此が即自己辯解で自分で言ひわけを無理に製造して下等な飲酒欲に勝を占めさせるものである。

學問に勉強嫌ひの生徒は今日は頭が少々痛みさうだからと云つては宿題を怠り今朝は風が寒くて風を引きさうだからと云つては遲刻をし、用紙が無いからと云つては製圖を怠り、湯に入つたからと云つては作文を怠り、暑ければ暑いからと云ひ、寒ければ寒いからと云ひ、何ともない春や秋には物見遊散に行かねばならぬ之も交際上必要だからと云ふ。

實に其辯解の仕方が巧妙であつて寧その辯解に力めるだけの努力を拂へばモツト立派なことが出來やうにと思はれる位である。

意力の數的打算

今假に甲乙の二人がゞちらも十の意志を以て居るゝして甲は二の困難に打克つて十二の意志ゝなり更に四の困難に打克つて十六ゝなり更に十六、三十二、六十四の困難に打克つて次々二十四、四十、七十二、百三十六の意志力ゝなるに引きかへ乙は二の欲望に負けて八の意力ゝなり、更に一の欲望に負けて七の意力ゝなり次々些細の欲望にでも負けるやうになつて最後に零ゝなる。即克己心ゝ云ふものは修養の如何によつていくらも助長するこゝも縮少するこゝも出來るものである。讀本一ページを讀み得たものは更に二ページを讀み得る自信が出來、二ページを讀み得たものは更に四ページを讀み得る自信が出來るが、始め讀本一ページを讀み得ぬものは更に半ページをも讀み得ずなり更に四半ページを讀むこゝすら嫌になり八分ノ一ページ十六分ノ一ページ三十二分ノ一ページをさへ讀むこゝは臆空ゝなつて遂には全然讀書の不可能な人になる。その他日常百般の事皆この類である。

誘惑

人はいつも六道の辻に立つてゐるゝ思へば間違はない。前に行かうか後に行かうか右に行かうか左に行かうか東に行かうか西に行かうかゝ、事毎に色々の欲望が『コッチへ來い〳〵』ゝ手招きする。其選りわけに忙しい譯で其時『克己心』ゝ云ふ武器のある人は悪い欲望がゞんなよい風をして美しい聲で誘つてもかぶりを振るだけの勇氣が必要である佛を拜む珠數の球は百八あつて人間の百八煩惱を棄てゝ大慈大悲の佛身に歸命頂禮するゝ云ふのがあのいはれだゝ云ふ『心猿意馬』ゝ云ふのも矢張人間の欲望のあばれまはるこゝを意味した佛語である。古の明主賢王も大抵は自分を曲げて名臣賢相の意見を入れた。

悪い欲望は恰も妖婦の如く外貌如何にも艶麗で人を魅するものがあるが内部に

はいつて見ると大へんな毒を含んでゐる。之を通常『誘惑』と云ふ。人間誰しも誘惑のないものはない、人の心は散り易くまるで柳絮のやうにそよとの風にも氣をこられる。教場の中へ雀の子が一羽迷ひ込んだらモウ一時間の授業は代なしになる。莊嚴な儀式の最中に一人過つて屁をひつたならば折角の儀式も滑稽になつてしまふ。この通り雀の子や屁までも一種の誘惑となる力を持つてゐるのである。別けても青春の男女は最此誘惑の多い時期で謹しんだ上にも謹しまなければならない。美しい花には蟲もつけば風もきつくあたるやうに人生の花たる青年子女は勢誘惑の種が多いのである。監督不行届の女學生が墮落したりするのもかうしたわけで彼等の後をつけねらう不良少年は日々に十數を以て計へられるものすらある。或は心やすけに物を言ひかけたり或は名を覺えて手紙を送つたり、造花を贈つたりいろんな徒をする。取締の嚴重な學校や家庭ではそれ位な誘惑でグラックやうな子女は無いけれごもつひこんなことが緒口

となつて段々深入するやうにもなるのである。此頃電車廣告の中に三人の男女學生が紅葉かざして大またに小路を行く處が書いてあるのを見た。如何にも紅葉狩の氣分をあらはして陽氣ではよろしいが、あれを見た男女學生はごんな感じがするであらう。誘惑は人のみならずかうした挑發的な文字や繪畫にもあらはれるのである。

寶塚の少女歌劇を見に行くことを止めた學校があつて純藝術的の立場からこの教育上の立場から論ずるものごが區々になつて一時議論に花を咲かせてゐたやうであるが、其可否はごもかくごして余は此程さる中學生が或新聞の切り抜きを後生大事ご抱へ込むやうにして讀んでゐるのを見た。疊む拍子にチラご見えた其標題には寶塚の少女歌劇ご題して麗々しく掲げられてあつたから『此あるかな』ご思つてさきに禁令を出した學校長の心に肯くごころがあつた。學生が正課の勉強も忘れて少女歌劇に熱中するやうなごでは到底駄目である。それも歌劇そ

のもの丶純藝術趣味の上から心醉するならまだしもだがその劇に出演する特個の少女優を目あてに夢中になるなごこは沙汰の限りである。

一頃の女學生はよく小說を讀んだ。此も小說そのものを純文學的に見るのならばまだしもだが彼等が見やうこするのは大抵俗惡なもので初心な處女心をかき濁すやうなものが多い。別に文章の妙を味へるでもなく、構想の趣向について考へるでもなく蜜のやうな青年男女の對話のやうなこころをつまみ〳〵に見るだけのことである。つまり彼等は彼等書物によつて自己を語られる愉快を以て見るのである。かうした男女學生の等しく陷る破目は空想病である。終日終夜何を考へるこ云ふでもなく何をするこ云ふでもなく茫々然こして星を眺めたり雲を眺めたりして取こめもないここを次から次へこ聯想して數學をしかけても嫌になり英語を暗記しやうこしても注意が纏らず殆ど氣樓のやうなロマンチックな想像に耽つてあたら一刻千金の若い時を有耶無耶に暮らしてしまふ。實

に惜むべきの極こ謂ふべきである。

誘惑は其貌美しくして其味甘く其聲滑らかにして其香馥郁一寸見には如何にも好ましいものゝやうにある

口に蜜あり腹に劍ある

毒婦にたこへるが一番ふさはしいであらう。有名なミルトンの傑作パラダイス、ロストは何を暗示してゐるであらうか。人間の始祖たるアダムこイヴの男女は始め淸淨潔白殆ど神に近い人間であつた、そこでエデンの園の園守こなつて朝夕神に奉仕した。或時神の御不在中こつてはならぬこ云ふ知慧の菓の下を逍遙してゐた。その時惡魔は誘惑の美しい小蛇こなつて樹蔭にあらはれた。先づイヴに囁いた『美しいイヴ樣あなたがその菓をこつてたべたらモツト〳〵美しく賢く善くなつておしまひには神樣になりますよ』こ云つた。おゝその聲の如何にスキートなりしこごよ……意志弱き彼女は直ぐ其誘惑にかゝつて件の菓を

こつて食べた。味甚甘美である。そこへアダムが來た。彼女は其由を夫に告げて『わたし一人神になつたつてあなたが居なさらなきやつまらないから是非おたべなさい』と勸めた。此も一種の誘惑である。男は女の言には信をおかなかつた。屹度神罰が當るであらうことは思つたが已に最愛の妻が之を犯したからには自分も同じ制裁を受けるのが愛の道だと覺悟して又之を喰つた。案の定神慮甚激し給ひ立ごころにお叱りを蒙つてエデンの園を追ひ出され此下界に下つた云々と。此其極めて梗概である。吾々の始祖たるアダムもイヴも已に誘惑の手にかゝつたのだから其子孫たる吾々はみんな遺傳的に誘惑される性質を持つてゐるのである。

誘惑の奥の手こして有つてゐるものは挑發である。英語で之をフラッテリングこ云ふ。煽ぎ立てるの意である。自分に對して正當なる自己評價を爲し得る人は此手にかゝることはないけれごも少し人の甘い言葉にかゝりやすい結構人は大抵此手で誘はれる。

自己評價

自己評價は之を三種に大別することが出來る。一つは自分をあまり高く値ぶみするもので傲慢こか尊大こか己惚れこか潛越こか誇大妄想狂こか云ふのは皆これから生ずる惡德である。今一つは反對に自分をずつこ安く見積もつて世の中に自身程つまらないものはないこ思ふ思ひ方で自屈こか卑屈こか卑下こか引込思案こか臆病こか云ふ氣の弱い風は即之から生ずるのである。今一つは自分を高くも低くも見積らず自分の實際の値打だけに見積もるものでそれの正當なものは自覺こなり自信こなり自重こなりそれの少し挫へ目なものは謙遜こなり辭讓こなる。

人間大抵の者は己惚を持つてゐるこ云ふのは自分を愛するの餘り自分の惡いこころに氣がつかず自分の善い所ばかりに氣がつくからである。自分は此通り學

識を持つてゐる、自分は學位も持つてゐる、自分は可なり筆も立つ、自分は雄辯家として聞えてゐる、自分は德望家としても大分人が心服しかけてゐる、自分は家柄がよい、自分は人に憎まれたことがないと何かなし自分の長所を列擧したがるのは此人間の己惚性の發現である。考へて見ると己惚は善い意味に於ては一大慰安の源泉で人生此がありやこそ遣る瀬があると云ふものである。他から見れば成つてないやうな阿多福でも阿多福自身はいつかごの美人氣取りで鏡の前に立つたり座つたり笑つたりすねたりしてイヤ眼元が涼しいの齒を出した所が可愛いのと何等かの美點を自分で發見して慰めてゐるから天下泰平でいけたもんだ。社會からは散々にけなされ親戚からはボロクソに爪彈きせられ、あれでよくもいけたものだと思はれるやうな人でも當人には人に知られぬ得意の境があつて『今に見ろ、笑つてる奴の目に物見せてやらあ』と飽くまで自分の力に己惚れるから無事安穩に行けたものである。甚しきは乞食までも薦の着振で自慢することがあると云ふのだから

明月や來て見よがしの額振

お江戸八百八街を股にかけて横行した男だてなごは無理からぬことである、が併此己惚があるから人間はつひその誘惑の手に囚はれ易いのである。バラダイス、ロストのイヴに若己惚心がなかつたら誘惑の蛇が『アナタは美しい』の『アナタは神樣になれる』のとおだてゝも決してその毒舌にはかゝらなかつたらう。呉服屋の番頭が『マア奥樣ならばコレ位派手な柄でなくつちやお似合になりますまい』なごおだてると『オヤさう』なまらず主人の方を顧みて『アナタ此を』なごゝねだりだす。己惚は實に誘惑の乘ずべき唯一の機會である。

こは云ふものゝ人間誰しも褒められて氣持のわるいものはない。相手が相當社交的禮法の意味に於て拂つたお世辭は心よく受けて快く返すべきである『ナン

ト可愛い坊チャン』なご云ふ來客に對して『彼奴此兒を憎いこ思つてゐるかも知れないのに可愛い坊ちやんなご云つて人を己惚れさせやうこしてゐるのではあるまいか』なご根掘り葉掘りの疑ぐりは却てよくない。唯こつてつけたやうなお追笑を云つたり、心地が悪い程上手を云つたりする人は氣をおいてウカこ其手に乘らぬだけの用心が肝腎である。

自慢

己惚は誘惑の餌こして恐るべきものであるが之を外部にあらはして人に迷惑をかけない中は唯誘惑に陷らないやうに注意さへ忘らなければまだ差支はない。誰も皆自分の夫を良い人こ思ひ自分の妻を賢い婦こ思ふこころに故障を持出すものが無いのこ一般である。處がその己惚をそのまゝに外部にあらはして他人に視せ聽かせする段になるこそれはモウ『自慢』こ云ふものである。

自慢高慢馬鹿の中

こも

自慢の糞は犬でも喰はぬ

こも云ふ。此程嫌味なものはない。尤自慢にもあつさりした罪のないのはよろしい。競技で一點を贏ち得た時の自慢、獵の自慢、料理の自慢、早起の自慢、菊やダリヤや牽牛花の自慢こか云ふ風なここは我人共に好笑の種こなつてちつこも嫌味がない。又自慢云ひの一種に法螺吹きこ云ふのがあつて何でもかでも自分のしたここで大きな法螺を吹く一尾漁つた鯉なら車で運ぶ程捕つたこ云ひ一尺位の鯉なら一抱へ程もあつたこ云ふ。此も法螺吹で通つた人の法螺なら一種の愛嬌だが餘り感心したここではない。

又氣炎家なるものがあつて其着眼する所はいつも世界の大勢や一國の形勢や極範圍を狹めても政治界こか實業界こか廣く全局を達觀したらしいここを言つて

よろこぶ人である。一寸出遇ふ『どうです、此頃御隱居の持病は出ませんか』など云ふと御機嫌が斜になつて『君そんな小さいことを問ひ給ふな日米協約は近く已に發表されんとしつゝあるではないか、曩に米鐵輸出の禁止案に對して一警告を與へた吾輩の意見は正に這般の消息と一味氣脈の相通ずるものがあるのを認めて吾輩は衷心愉快に堪へないのだよ』なんてまるで世界を一呑みにしてまだ餡パンの三つも頬張れさうなことを云ふ。一警告か二警告か知らぬがその人はアツケに取られてへヘンと云つたやうな顔をする。とそれが又先生のお得意で何だか人を氣炎の煙で捲いてしまはうと云ふ筆法である。此は話すのには愉快な連中だが偖世渡りの道と云ふものはサウ〳〵世界の大勢ばかり論じて居つて自然に米が湧きも醬油が湧きもするものでないから氣炎家なるものもあまり感心したものではない。

まして正眞の自慢話ときては到底聞かれたものではない。一つ自慢話をする爲

に聽き手はその反對に彼のあらを計へて心のうちで棚おろしをする。僕のからだは鐵のやうなもんだと云ふと聽き手はナンダ去年の今頃腦貧血で卒倒したりなんかしてからにと思ふ。僕はまだ酒に醉つぱらつてくだをまいたことはないよと云ふと聽手は馬鹿云ふな今年の新年宴會に誰それ君が仲裁でヤツと喧嘩の手を引いて車で送りかへされたりしてゝからにと思ふ。僕は未だ曾て嘘を言うたことが無いと云へば何を云つるてんだイツカの阿彌陀闘にカンニングして半分しか出さないで居つてと思ふし、僕は暫らくでも無意味に時間を過すことをしないと云へば、ようもそんな口幅廣いことが云はれたもんだ細君が歸る日だと云つて四時間も驛に立往生してゝからにと思ふ。人間は妙なものでコンナ塲合盛に反感が起きるものである。自慢は自身にとつては油斷の原因となり他人が自身に對しては輕侮、擯斥の原因となる。謹んだ上にも謹しむべきは此惡德である。

生徒の中にもお家自慢や財産自慢や地位自慢や職業自慢で他から嫌はれるのを往々見る。女の中には別して容色自慢こ云ふのが非常に多い。同じ自慢でも親父自慢や息子自慢はまだしも罪が無いがさりこていつも同じことを聞かされては鼻についてよくないものだ。

有名な鹿の水鏡は此を諷したもので『オレ程立派な角を持つてゐるものはない』なご云つて水鏡に映る自身の姿に見惚れてゐる間に獵師が來たのでコレハこわてふためいて林の中へ逃げこむこ、あつちの枝でもこつちの幹でも引つかゝつて最前まで自慢をしてゐた角があるばつかりでこう〳〵獵師の手に捕へられたこ云ふ。

同じやうな寓話に樫の實を仰ぎ見て『何だ此大きな樹にアンナ小さな實しかよう結ばんのかナゼもつこ大きい水瓜のやうな實をならせんか、樫の木、お前は腑甲斐なしだネ』つて廣言してゐるこ樫の實の一つが上から突然落つこちて件の男の鼻柱へコツン、アイタ……ヤアこりやひごいめにあつた、小さくてよかつたアレが大きな水瓜だつたらオレの命はフイになつてしまふこころだつた桑原々々こ逃けて行つたこか。

又花の傳說物語を見るこ昔高慢な王子があつて、何もかも顧の先で人を使つて威張つてゐたのでおしまひには足から根が出て頭が白い花に變つてしまつた、それが今の水仙花だこ出てゐる。何れも自慢の害を說いた好敎訓である。

自慢話の外に話の種をもたないこ云ふ人は如何にも頭腦の貧弱な人で、そんなのはいつも自分より下の地位のものか、ズット無識な勞働者の仲間入をしては葉がきかうが少し目上の人こか相當な智識階級の人々の列なる席へは出られない。つまりお座へ出せない人間である。

イエス、ノーの使ひわけ

人生の迷路に立つてイエス、ノーの使ひわけが充分になれば最早其人は品性が

出來てあるこ見てもよい。樣々の欲望が眼前に並列してごれを見てもよささうである。その中について是非善惡、正邪曲直を辨別して是なるもの善なるもの正なるもの直なるものにはイエスこ云ひ非なるもの惡なるもの邪なるもの曲なるものには斷乎こしてノーこ呼び得るやうになれば克己は最早太皷の判を捺して卒業證書をわたしてもよい。所が大抵の人は此イエス、ノーの使ひわけがうまく行かぬ。之をよく使ひわけた好例こしては細川忠興夫人をあけるのが適切だこ思ふ。石田方の使ひが再三再四やつて來て『外は物騷だから城内へ入つて淀君の所で安心に奉養せられるやう』こ例の甘言たら〳〵で進めて來たが『私主人の何こも申さぬ間は一歩も此處を退くここなりませぬ』こきつぱり斷つたのは『ノー』こ絶叫したものである『ごうあつても入らぬこならば兵を差向やう』こ威しても『ごうなこなさいませ妾は妾の道を守ります』ビシャンこしめてあこ知らぬ顔で澄ましてゐる。女も此處まで理智が秀で、居たならば男以上で

ある。遂に彼女は三兒を屠つて從容及に伏した。彼女の芳名は實に千載不朽こ謂つてもよい。然るに近頃の子女はごうであらう、百の教訓千の意見を柳に風こ吹き流してあらぬ桂庵の口車に乘せられ、高等女學校を卒業した程の者が公娼を志願したり女優になつたり女優公娼以上に墮落して早く處女の純潔を汚し侮はこちらから挑發的に出て『誘ふ水あらばいなん』こそ思うて見たり、若くは一時の甘言に釣込まれて生涯取かへしのつかぬ傷者にされたりなご實に誘惑にかけて弱い骨頂のものが多いのは社會の風教上實に寒心の至である。

男子の方の學生だつてさうでつまらぬ私立學校に籍をおいて國許へはハア病氣した十圓送れ、本代だ二十圓送れ、友達こ日光行だ三十圓送れこ引つきりなしに金を催促して爲替が舞ひ込むこ早や其足でバーに行くビヤホールに行く牛屋に行く、狹い横町の路次に出入する、時には生意氣に帝劇にも行く。可愛さうなは國の親で、そんなここゝは露知らず、學問こ云ふものは大したお金が入る

ナと思つて、何此も息子の出世の元入れだと云ふもんで種々辛苦で作つた米を賣つては金に代へ牛を賣つては金に代へ、三軒目の村長の息子に手紙を書いてもらつて小一里もある郵便局へ持つて行く。それが四五年續いた時分に息子は道樂學校を卒業してノラクラ博士の肩書をつけて歸つて來る。今日は村の巡査と議論をした、今も向ふの役場の收入役と惡口雜言の浴びせ合ひをしてゐたなど言ふ噂ばかりが盛にたつて、慾ひ鋤鍬とつて百姓するのは厭なりさりとて何處も傭ひ手はなし、そんじよそこ等の樂隱居が日なたボツコをしてゐるところへ行つては嘘八百を並べて東京話をするのが關の山となる。世に誘惑の毒牙にかゝつてあたら生涯の大事を誤まる學生が蓋幾人あることであらう。

古人の克己

それ等に比べると昔の宗教家はよくもアレダケ克己制欲を實行したものだと思

ふ。釋迦の九ヶ年の修業のえらかつたことは云はずもがなだが、平家物語などを見ると文覺上人の荒行なども隨分大したものである、否通常無名の坊さんでさへも肉は食はず妻帶はせず功名富貴安逸遊惰それ等一切の惡欲を退けて一意專心佛教の玄義を味得し讀經梵唄の聲に明け暮れて身には綾羅の派手もなく忍辱の衣を纏うて藜藿の汁をすゝり見るもいぶせき山寺に晏然泰然平然と構へてゐたものである。甚しきに至つては人間最大の欲望たる生命欲をさへ抑へつけたものすらある。即武田勝頼の師僧の快川禪師は其である。味方は連戰連敗で最早城内の一角に火をつけやうと云ふ段になつて『師僧も早くお逃げ下されい』と人をやつて勸めてもビクともしない『アゝ危い危い火の手はもう大分近くまで延びてゐますぞ』と警告しても一向平氣で落ちつき拂つて

心頭を滅却すれば火も亦冷し

と云つて尙座禪を續けた、城が陷つて數多の兵士が燒跡の灰掻きをする段にな

つて師僧の居室へやつて來るこ、此はしたり、師僧の死體は寸分も動かず座禪を組んだまんま灰になつて居つたこ云ふ。火のやうな暑いものでも暑くない冷いこ思へこ抑へつけて自若こして死に就いた彼の克己は卽生存欲をも超越したものこ謂ふべきである。西洋でも純清派の修養は矢張之に近いものである。

日常些事の克己

併亦觀やうによつては斯うした極端な克己は却つて行ひ易く、平素日常些事に就いての克己が却て行ひ難いこも云はれぬこことはない。非常なこことをするには非常の決心を以てかゝるから存外わけなく出來るが日常平凡の事は左程力を入れないからつひうかこ下等な欲望に制せられ易いからである。併荀此道理がわかつてゐる以上よしや鷄肉を斥くに牛刀を以てするの嫌はあるにしても日常些事に當るにも尙懸命の努力を拂ふがよい。例へば『煙草をやめやう』こ決心すれば爾後『ア、一服すひたいナア』こ思ふ頃には『若之を吸ふ程なら自分の命は立ごころに無くなる』位に思ひ込んで『ごうあつても吸つてはならない』こ云ふ克己心を產み出すやうにする『命』を片方にかけた天秤なら大抵の者は負けてしまふ。朝起きるのが嫌だこ思つた時も今起きなけりやあ命はないものだこ思ひ込めば譯なくスッこ起きられる。鰯のさしみがたべたい時にも、そんなものを喰つては命がなくなるこ思ひ込めば苦もなくそんな欲は引つ込む。高貴織の着物が着たい、金側の時計が提げたい、ウヰスキーが飮みたい、羊羹がたべたい、氷水が飮みたい、ラムネがほしい、サイダーが欲しい、アイスクリームが欲しいなご思つた時にも『オット危い命がないぞ』こ覺悟をすれば苦もなく抑へつけるこごが出來る。

明治の最後の名臣の隨一たる乃木將軍はいくら冬の寒中でもドン〳〵暖爐をたくこ云ふこごはせられなかつた。唯やうやく寒さを免れるこ云ふ程度に止まつ

てをつた。そして始終云はれるには荷身は軍籍にあるものが一朝懸軍萬里の異域に身を曝さねばならぬ時に方つて平素皮膚の鍛練が不充分な爲に思ふやうの活動が出來ないやうなことでは到底お國の役には立たないこ。そして常から着物はいつも人よりは二三週間後れて單を着綿入を着られた。是實に吾々修養上の活教訓で吾々日常には斯うした種類の克己が大切なのである。それだのに氣の早い都會の人は五月に單を着て九月には早や袷を着十月になるこ冬のインバネスまで着、人よりは早いめ〳〵に着て得意こしてゐる人が多いがチト將軍の爪の垢でも煎じて飲ませたい。

明治の新文明に貢獻するこころが最多く獨立自尊主義の鼓吹者こして今も萬人の崇拜する福澤諭吉先生は安逸遊惰の矯正法こして毎日早朝に起きて米を一斗搗き午後は居合を千本抜いて居られたが此日課は老後に至るまで唯の一日も缺かされたことがなかつた。其後中風にかゝられてからは或は過激に失しはすまいかこ思つて醫師に相談をして『ごちらか一つやめたらごうかこ思ひますが』こ話されるこ先生の不行儀こ醫者の不養生こやら、その醫者は米搗きも、居合抜もやつたことがないものだから出鱈目に『そりやごちらかえらい方をおやめになつたら宜いでせう、何なら米搗はおよしになつちや如何です』こ云ふこ先生は眞面目に『イヤ私は米搗よりか居合抜の方が苦しいです』こ言はれたので、其醫者は大に面喰つたこ云ふことだ。今時の學生は夏の土用稽古や冬の寒稽古に少し朝早く起きるのを大變な臆空にするが偉い人にならうこ思ふなら此福澤先生にあやかるやうにするがよい。

餘談

人は上野の春に醉ひ百花繚亂の下に美酒佳肴を並べて管絃喧啞歡樂の限りを盡してゐる。それを見ては誰だつてあゝ遊びたい、騒ぎたいこ思ふのも無理はな

いけれごそれをツンこ抑へつけてセッセこ勉強をしなければ偉いものには成れない。世間並のことをすれば世間並の人にしかなれない。今の學生は餘りに早く世間心が發達して學問が腹に這入らぬ先につまらぬ世間的の贅澤を覺え、學校に籍の在る間からお茶屋に行つたり料理屋に行つたり其他色々の紳士的の道樂に耽らうこする。此は成功の大妨害である。昔の帝大學生は以前の兵兒の詩にあるやうな短褐弊袴に破帽にチビ下駄こ云ふ風で『書生さんだぞ』こ大手を振つて日本橋あたりを濶歩したものだが、アノ頃の學生の方が克己制欲の點に於ては優れてゐる。そして頭は單純で率直で學問一心で世間の惡風以外に超然こした趣があつた。それに今時の學生は早く世間じみて『書生さんだぞ』なんて空威張する癡氣や衒氣もない代りに學生時代から八字髭を貯へたり金緣の眼鏡をかけたり立派なステッキをついたりして得々たる風があるが隨分片腹いたいものである。

さなきだに歡樂の極まるところやがて哀情こなるを思へば克己制欲は學生こ云はず青壯年こ云はず子女こ云はず主婦こ云はず此際誰もウンこ努力して養はなければならない首德である。

第七章 生戰論

緒言

外はまだホノ暗い中に工場の氣笛が響く。生の戰の進軍譜である。晝の日中にヂッこして街の音に耳を傾けるこ車の音作業の音喧々囂々爆々こして雜音がこりこめもなく耳朶をつく。生の戰は今正に酣である。夕方になるこまた工場の氣笛が響く。生の戰の中止の合圖である。見よ法被を被つた勇士は今幾錢かの報酬を得て家路についてゐるではないか。あゝ衰へたるその瞳よ、萎えたるその足よ。一餐の粗食に飢ゑこ疲れこを醫して翌くれば又も生の戰の修繕の巻へ驅けて行く。翌くる日も又翌くる日も。斯して人間はここしへに戰場の勇士こならなくてはならない。

十九世紀の理學者ダーヴヰンが一たび萬物進化の原則、優勝劣敗の眞理、適者生存の法則を喝破して以來地球上のありこあらゆる生物は各々自己の發展を企圖して陰に陽に相軋轢し相制肘しあつてゐるここが明になつた。列國は列國同士競爭をすれば政治家は政治家同士競爭をする。靴屋は靴屋こ競爭をし下駄屋は下駄屋こ競爭をし、あらゆる同業者は皆お互に競爭し勝たう負けまいこ苦心もすれば努力もする。その結果こして文明の地平線は月一月こ高まつて行く、その結果こして優者はいつも勝者こなり劣者はいつも敗者こなつてこゝに生戰の活畫が完結する。

奮鬪は現世紀の基調

米國スタンフォード大學總長ジョルダン博士はその著『廿世紀の青年に告ぐ』こ云ふ書の始めに『奮鬪的ならざるべからず』こ見出しして次の一文を掲げてゐる。

廿世紀は奮闘的ならざるべからず。吾人は『奮闘的生涯』を以て吾人の喋語となし此語を提起し來りて之に國民的威嚴を附與したる二十世紀の一青年(大統領ルーズヴエルト)に對して宜しく謝する所あるべきなり。吾人の世紀は成すべき多くの事業を有す。大膽なる事業を爲さゞるべからず、尠貴なる事業を爲さゞるべからず、煩雜なる事業を爲さゞるべからず、至難の事業を成さゞるべからず、永久の事業を成さゞるべからず。吾人は此等の事業に對して纔に百年を有するのみ。而も其百年の内吾人は已に其數箇年を消盡したるに非ずや。之を思へば奮然こして努力せざるを得ず。此種の大事業を成す事こそ吾人の使命ならば一瞬時こ雖怠慢なるここ能はざるなり。怠慢なる男子こ女子こは疑もなく吾人の進路を妨害せん。彼等は成すべき事業の存するここを知らざるもの、新世紀の來りて新義務の生じたるここを知らざるものなり。新世紀は殻に隱るゝ蛤に對するが如く、樹

木に隱るゝ栗鼠に對するが如く、甚寛容の態度に於て此等怠慢のものを看過せん。されご新世紀は吾人に命ずるに勤勞を以てすべし、吾人に負はしむるに義務の重荷を以てすべし。而も賀すべき哉今や奮闘的生活の進擊は將に世紀末の惰容に代らんこす。活動の人は活動の終に何を得べきやを問ふ者に萎靡的精神に代らんこす。努力に努力の報酬ありこの感情は將にあらず。人生は常に快活なる生活によりて賠償せらるゝなり。(若宮卯之助氏の譯による)

即奮闘的生活を以て廿世紀の特徴こ看做したものである。それかあらぬか近頃奮闘々々こ云ふ語はよく新聞や雜誌に散見してゐるし、奮闘的生活若くはそれに類似の題目の修養書類は隨分澤山出てゐる。今亦玆にそを縷々こ書き並べるここは屋上屋を重ぬるの嫌はあるが、余は上述諸先輩の意見こは少しく趣を變へて主こして余自身の生活から得たる實感を系統だて、話さうこ思ふ。

矛盾に生きて調和に解決す

人間は矛盾に生きて而も調和に解決をつけなければならぬ實在である。だから『父母居ませば遠く遊ばず』こ云ふ傍には『土着心を去つていつまでも鄉里に眷戀するな』こ云ふ。百萬の敵を鏖にする程の勇氣を悦ぶ一面には心なき一寸の蟲にも五分の魂のあるを察して同情せよこ勸める。金をためるがよいこは云ひながら拜金の徒こなる勿れこ云ふ。禮儀作法を重んぜよこ云ひながら姦落で無遠慮に打解けよこ云ふ。前のこゝはよく覺えてゐよこ云ひながら大抵のこゝはあきらめよこ云ふ。他人に從順なれこ云ひながら自家獨特の見識を具へよこ云ふ。租衣粗食に安んぜよこ云ひながら不養生はいけないこ止める。大抵のこゝには斯うした矛盾の教があつて阿呆正直な人はごつちしてよいか途方に迷ふやうなものではあるが、併し物各中庸あり時こ塲合に應じて適當に取捨選擇をしたならば吾人は略よろしきを得るのである。

そこで前には感謝生活を鼓吹した同じ筆を以て今又茲に奮闘生活を奬勵するのは一見甚しき矛盾のやうにあるが此も人間各自時こ塲合こに應じて常識の程度の判斷を下せば直ぐこわかることである。

上見るにきりなし、下見るにきりなし

こ云ふ。それは、つまらない下等の欲望を抑へる塲合には『上を見な下を見よ』こ云ふ意にこつて何でも『結構だ、有難い』こ滿足で居ればよいが他の塲合に於て『イヤもう智識は此位で結構此以上は望まない』こ云ひ道德で『イヤもう此位で結構此以上善人にはなれなくてもよい』なご云ひ出した位には人間退歩するばかりである。さう云ふ塲合は反對に『上を見よ、下を見な』こ云はなくてはならない。今の余はいつも昔の木村長門守や源義經のやうな若大將が緋縅の鎧冑形の兜で汗馬に鞭うつて東西無盡に驅けまはつて火花を散らして戰つてゐるあ

ゝした若々しいかひ〴〵しさを以て此人生の戰鬪員の一人として働きたいと思つてゐる。

奮鬪々々つて言ふけれども誰を相手に戰ふのか何を武器にして戰ふのか何だか實躰の空虚な聞えの劇い言葉である。まさか途中出あつた人をいきなりステッキで毆ぐるわけにも行かず列車中で一緒になつた旅客に罵詈悪口をあびせるわけにも行かず、奮鬪と云ふ詞そのものは如何にも立派にかひ〴〵しい音響を以てゐるがその内容がどもう漠としてゐる。思ふに生の戰は兵の戰のやうに劇甚ではない、刄一本持たず彈丸一發も放たないで極婉曲に開始される。又生の戰は兵の戰のやうに臨機的のものでなくて二六時中常住不斷の事象であると云ふことも其一特徴である。實際の戰爭ならいくら百年戰爭など云ふ長期な軍でも百年たてば無くなつてしまふ。百年たゝなくても其慘劇は開戰中だけであるが生の戰は時の晝夜を問はず季の寒暑を論ぜず絶えず盛に實演されつゝあるのが一つの特徴である。又生の戰は兵の戰のやうに空間の制限もない。今日軍國の狀態にあるものは唯交戰國だけであるが生の戰となると人民の文野をとはず地の東西を論ぜず、到る處に演ぜられてゐる。又生の戰は兵の戰のやうに戰鬪員の制限もない、女子も小兒も老人もあらゆる人は皆參加者である。

我を助くるものは我

凡そ世の中に何が一番たよりになるか。金銀財寶も與市兵衛のやうなことでは却て我身の仇である。親・兄弟もいつまでも吾身をかばつてくれる譯に行かぬ。友人知己も或程度までは信賴することが出來るがそれ以上となるとさう〳〵立入つて補助を仰ぐわけに行かぬ。

成程子にとつては親程たよりになるものはない、親に抱かれたやうに思うて安心する

なぞ云うて安心のたゝへになつてゐるのもそれが爲である。それでも

此兒棄てざれば此身飢ゆ

ゝ云つて

子を棄てる籤はあつても我身を棄てる籤はない

のである。またよしやその一代は眼に入れても痛くない程愛してくれたゝして

も一旦冥途の旅についたならばもう如何ゝも仕方がない。まさか草葉の蔭から

補助を仰ぐわけには行かず

南無女房乳をのませにばけて來い

なぞ云つたつて到底暖い乳を我兒に哺む譯には行かぬのである。又兄弟も人

によつては實の親子同樣に親しくするこゝもあるがさりゝていつもお互が一緒

でゐるわけでないからいつかのやうに天神橋の踏切で列車に轢かれて即死する

やうな危いめに遇はうゝする時でもオイソレゝ救つて貰ふ譯には行かぬ。夫婦

は一心同躰なぞゝ云ふけれども妻の難産を夫が代つて苦しむ譯には行かず、夫

の寃罪を妻が身代りに受ける譯にも行かぬ。親戚や友達や知人も時には大さう

親切にしてくれて非常に助かるこゝもあるけれども、今日のやうな忙しい時世

にいつも相往來するゝ云ふ譯にも行かぬ。いつも我身に附添うていつも我身を

援けるものゝ云ふゝぞうしても我身より外にはない。我身ならばさすがに我身

にふりかゝる災難をじつゝ見て看ぼかしにするわけに行かぬ『アヽ僕の右の手

が燒けかけてゐるナヽ氣の毒なが一寸急ぐからホッておかう』ゝは云はれない。

『ナニ胃が痛いそれは嘸困るだらうな、デハ一寸龜井戸まで行つて歸りに見舞

に寄りませう』なんてのんきなこゝはぞうあつても云はれない『アチヽッ』ゝ手

を引く『あ痛ッ〳〵』ゝ腹を抑へる茶を呑むやらわめくやらなか〳〵の騷ぎ

である。して見れば廣い世界で本當に自分のこゝを思ひ自分を援けてくれるも

のは自分より外にはないのである。で人々は各自に此こゝをしつかりゝ心に彫

りつけて自分こ云ふものを決して粗忽に扱はぬやうくれぐれも愼密な注意が肝要である。

感奮興起と立志

欲の多い人間は若しも千年の齢を健康で保つことが出來るならば誰しも一人で大政治家こもなり大將軍こもなり大宗教家こもなり大教育家、大實業家、大藝術家、大慈善家こあらゆる方面で最大級の肩書をこりたいこ希望することであらうけれごも人間の壽命は五十年七十は古來稀なりこ相場がきまつてゐるのだからさう〳〵過分の欲は出せない。加ふるに人間天賦の能力にも不同があり、精力そのものも一定の制限があり境遇の如何も少からず制肘の事情こなるものであるから仲々そんな無鐵砲なことは謂ふべく實現すべからざることだ。一人で凡べての事に携はることが出來ないから弦に自分の關係すべき方面を一定する必要がある。之を職業の選擇こ云ふ。そして其中の一つをきめて一心に其成功に努力しやうこすることを立志こ云ふ。

職業の選擇に就きて

職業を選ぶについて注意すべき條件は自己の性能こ時勢の要求こである。此はごちらも大切なことで自分の性質に合はぬ職業をこつたならば當に其成功が困難なのみならず國家の人物經濟の立場から見ても面白くない結果になる。同じ五人の男兄弟でも官吏のすきな者もあれば、百姓の好きな者もあれば商賣のすきなものもあれば、軍人になりたいこ云ふのもある。單に好き不好きだけでなく實際に適不適がある。

餅屋は餅屋

こ云ふが餅屋が酒屋になつたり酒屋が油屋になつたりすることすら不適當であ